第二部

部報・記録から

1950.06 発行，西高山岳部報 No.3

第廿四回例会　雲取山

一泊二日

四月二十九日(土)　晴のち曇時々雨　2E　中野英司

立川発(六・四四)—氷川(八・〇三)〜八・五〇)—食事(一〇・五〇)—鴨沢(一〇・二〇)〜一〇・二五)—小袖尾根上(一二・四〇)〜一二・四五)—七ツ石山分岐—水場(一三・〇〇)〜一三・一〇)—食事(一四・一〇)〜一四・三〇)—雲取山ブナ坂(一五・三〇)—武州雲取小屋(一六・〇〇)

四月三十日(日)晴

武州雲取小屋(四・一五)—雲取山(四・三五)〜四・五九)—大ブナ食事(六・〇〇)〜六・五五)—七・三〇)—唐松谷流(七・二〇)—唐松谷出合(一一・〇〇)〜一一・四〇)—小川谷出合(一四・二〇)—孫惣谷出合(一三・四〇)—日原(一四・四五)—倉沢橋(一五・一〇)—立川(一八・二六)—氷川(一六・二五)〜一七・〇〇)—解散

△参加者　L平沢(2A)　2A山口・笹田　2B森沢　2C長瀬　2D村田　2E中野・田中(実)・鈴木　2G平沢・鴻池　以上12名

氷川発の丹波行バスはぎゅう〜。鴨沢に下りた時は鴻池に僕がよってふらく。〜川以後僕は全然調子が出なかった。鴨沢からの上りは尾根の腹をまく道、尾根の上に出てからはかなりの急勾配の道、七ツ石分岐から水場で一休み。つめたいうまい水をのむ。このあたり僕の持って来たペニシリンの効。大分はんじよう。皆まめが出来たらしい。この辺から空模様があやしくなり、遂にポツポツ来る。しかし大したことはなく、大ブナまでは皆もく〜と上る。ブナ坂で食事。皆元気はよい。この辺空は降るでなし降らぬでもなし。薄い霧が一面にひろがっている。すぐそばのサルオガセ、赤ばんだ白樺、新緑の木々が霧の中にかすんでいるさまは実に美しい。ドビッシーの音楽を想はせる。雲取山迄気は[illegible]あせるがなかなかはかどらない。年はむかすぐ冷って寒い。やはり高山だなあ。皆で谷が深いなあと一驚する。雲取山の景色が又何とも云へない。霧にかすんだこの景色はドビッシーの夢想曲の中の雲を想はす、今もあの木管楽器の印象的メロディーが聞えて来るやう。実に。数分にしてガタ〜と来る。小屋迄の下り下々に残雪を見た。道はぐしゃ〜で歩きにくい。小屋につくと[illegible]員。下の方の奥だおしこめられる。皆は元気よくはゝまっているが僕は大分くたびれた。早速飯をたいて食事。続くと登山者がやって

来るが遂に六時過ぎあとから来る人々はみなことわられていた。ちょっと気の毒になる。上下合せて百八十の客だそうだ。ギョッ!!人間が多い為ふとんはださないとの事。ウーン。皆ダルてのやうに着て折りかさなって横になる。上をのばせないので立膝。帰返りさへ出来ない。ウエー。この様ではとうていねむれない。十一時に二度。寒い。足がぞくぞくする。外は濃い霧。リーダー平沢が仙人から日原谷附近を聞く。雪は全然ないとの事。熊は今年になって十頭とった。そして昨日七ツ石附近で見たものがあるとの話。よけい寒くなる。皆ねむれないらしい。山口は持参の毛布にくるまって気持よげに寝ている。腹具合の悪いものが大分いて僅の持参の薬が大分はんじょうする。注射を鴻池鉄本にうってやる。ちょっときどろむと三時半。皆がさごそと動いている。御来光を見まうと夫れ四時出発。雪取山に登った時は東の空がわずかに赤るんで来る。子五百米位の高さに一面の雲海が出来あがっている。実にすばらしい。見る前に白石山の間ふに甲武信を中心に山が連り、南東に七ツ方、鷹巣六ツ石が頭をのぞかせている。さっと太陽が雲海を突き破って上って来る。すばらしい。まったくすばらしい。実にすばらしい。来てよかったなあ。——カメラをだれしも持って来ていないのが実に残念。気がついてあわてて出発。大掛で火をどんどんもやして朝食。なかなかうまい。こゝで唐松谷に降りる事に決し下りにかゝる。新しく道を切り開いたらしく急な切り株がいっぱい。唐松谷は可懐谷だが道は谷の五十米位の上をうねうねと通っている。道とは云へない。踏跡かな。いろいろげんひゃくする。すだ時間が七時を聞いて皆めんどくさくなって谷筋を下ったら絶対に出合は出合はすばらしい。上流の可懐谷を見振り切れない。二回目の食事の後地図の道を見過して別路を行く。歩きにくい新道をえらんだのは失敗。出合から孫惣谷小川谷の合流点を見ながらの道で日原迄六時間かゝってしまった。太陽に

しないのが当り前だ。グロッキー気味でふらふらする。いやはや。絶体にこの道を通るのは厳目。地図上の径を通らねば。倉橋から六名がバスに乗る。他は氷川迄歩いた。実に愉快な登山だった。皆がこの登山に気をそろへたのは成功だったと云へよう。たゞ僕がグロッキーになったのをのぞいては。このコースの注意しなければならぬ点は絶体に日原から新道には入らず地図上の道で鷹松谷の出合に行くことである。この辺は「山と高原」の四月号の地図が参考になる。但し小河内線の時刻表がいくぶんこれと異っている。(完)

○反省　M.T.記

僕はLEADERではないのだから、この山行に対して、あまりとやかく云はぬ方が良いかも知れないが今後の部の発展に、何らか今回の山行に感じた点をのべさせてもらう。

概して云へば今回の山行は、十二名と云う団体の行動があまりかんばしくなかったと云へよう。

一、パーティの統合不完全

氷川――鴨沢間のバスによりグロッキーになったものがあったとは云へ、あまりにも休息をし過ぎたやうに思ふ。弱いものを中心として行動したのは良いが、雲取迄食事をのぞいて六回もの休みがあり、これによってより疲労を増した場合、パーティが完全に二分してしまった。

二、個人的感情による不和

雲取小屋による一夜から一部の人達に対する感情の突端があらわれていたやうに思ふ。殊にそれが小屋出発の場合にあらわれている。確かにこれは許されるべきものではなく、お互に自覚して行動を善き方向に導くべきである。

三、パーティ分裂

鷹松谷のガレ場では殆んどリーダーの命をきかなかった事に始り、ばらばらになった事は最悪の状件を考へると危険なものであり、殊に弱いものがあった時はトップも考へるべき

1950.09 発行，彷徨（西高山岳報改題） No.4

であらう。日原谷新道の鐵橋は、なれなかったためか、鐵道の木は新しいのであったのだから所間のあまりにもかゝったのは一つはパーティの不合によるものであったらう。

今揚げた事が主に時間をかけすぎた理由だと思ふ。又この山行が二日の短期間であったから良いものだが夏休みの長期間の合宿山行きには、いさゝか心配される。もう一つこんな事を云うと「エチケット」ならぬ「エケチット」と云はれるかも知れないが、本当に山森を愛してもらいたい。（むやみに自樺を切っていた）又唐松谷で、故意に石を投げ落すものがあったなど部員として恥ずべきである。

最後に今後の山行ではリーダーの注意を守って最も弱いものを中心に行動してもらいたい。

奥秩父主脈縦走

◇期日　七月十六～十九日　三泊四日

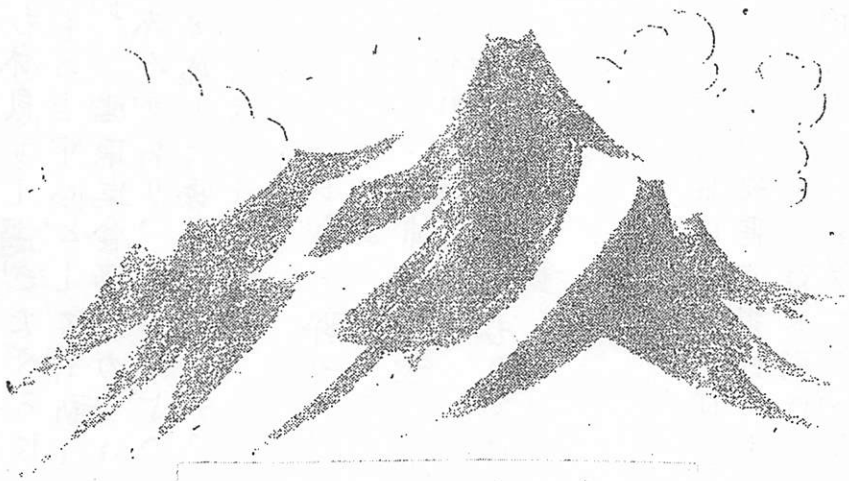
◇参加者　山神島一郎（3A）田中将利（2E）森沢拓治（2B）以上三名

○一日

○天候　晴夜雨

○コースタイム

新宿発（〇、〇五）＝小淵沢（六四〇）＝川上村（八、四五）＝瑞牆平（九〇〇）＝



カット 1950.09発行，彷徨 No.4 表紙

休憩(九、五〇—一〇、三〇)—信州峠(一二、一五—一二、三〇)—裏森(一三、三〇)—休憩(一三、四五—一三、三〇)—金山峠(一四、四五—一五、〇〇)—金山(一五、三〇)

御船一郎記

○宿泊は金山荷井館

費用　新宿—川上　一四〇円　金山宿料　一〇〇円　笠取小屋　一〇〇円、川野—氷川　五〇円　氷川—高円寺　九〇円

終列車に乗ろうと九時頃新宿駅に行く。乾徳山へ行く中野、鈴木の両君は来ていたが、同行の田中、森沢は来た来ていない。今日は土曜日なので、すでにホームは溢れるばかり到底坐れそうもないので零時五分のアルプス号に乗る、座席は運よくとれ既に槍へ行くと云う大泉高校の方と一緒になる。塩山で乾徳行の二人に別れてから元気しきっている僕等はほとんど眠られず早くも夜が明けるのが待たれる。韮崎では朝日を受けて黄金色に輝く甲斐駒や鳳凰に歓声あげ、小淵沢で大泉高校の方に別れを告げて前代の遺物のような小海線に乗換える。一時間程待ってと時十五分に発車する。汽車は白樺や落葉松のはえた八ヶ岳の雄大な裾野をのろくと行く。それでも日本最高の駅と云われる野辺山駅へ一三四六米)を過ぎてからは、スピードを増し、八時四十分信州峠に着く、すぐ御所平に向って出発する。間もなく導標に導かれて信州峠へと右折し、原部落からの道と合してからはトラックの通う位な広い道を行く、ふりかえれば特長のある男山岩峰が見え、右には対象的ななだらかなカヤトの女山が眺められて中々よい。空腹を感じたので直ちに朝食をとる。ここで始めてドロドロテンばりの瑞牆山が突兀として見える。ここから大したきつい登りもなくカヤトや樺木の中を行くこと一時間足らずで信州峠に着く、ここは眺望は素すばらしく明るい信州側に対称的な暗い感じの道を黒森に向う。坂を降り始めると瑞牆の大やすりかよく見える所がある。曲林の中の歩きより道を一時間ばかり下るとラチオの開ける黒森の部落に着く、ここから金山迄は瑞牆山の麓を行くのんびりした道だ、黒森の先で中食を取り松平牧場へと入る。尺山の牛馬に合う事を予想していたが、一匹の馬にも合う事もなくベンチのある金山峠につく、ここから明日登る金峰への道が左に別れている。それからうほんかわづかの down で今宵の宿金山の荷井館に着く、正面に金峰の頂上や大日岩が見えて、中々よい所だが蠅と蚊の多いのには閉口した。丁度金山に着いた頃から天候が急に悪化し夕方には雨さへ降り始めた。出発する時天気予報も天気の下り気味を報じていたので俄然憂鬱となり明日からの主脈縦走等おぼつかない様な気になり、はては水越峠を越えて出直おうかと云う説が出たが金峰だけは登ろうと云う事になり不安な気持で九時頃床に就いた。

第二日

金山(六、〇〇)—金山峠(六、一五—六、四〇)—富士見平(七、二〇—七、四〇)—大日小屋(八、二五—八、四五)—大日岩上遥分岐(九、〇〇)—大日岩(九、三〇—一〇、三五)—金峰山(一一、〇五—一一、五五)—朝日岳(一二、五五—一三、三〇)—大弛小屋(一三、三五)

五時に外沢に起されて外に出て見ると、空は晴れて星が輝いている。昨日の曇模はたちまち消滅んで急いで用意にかかる、丁度六時に出発する。右手に金峰の岩峰を眺めて登り、ここで朝食をとる。ここから昨日来た道と別れて、右に樹木林の中の道を行く。間もなく里宮平で、富士見平への道は但当に急である。清水のある所を越すと、瑞牆山への道と別れている富士見平につく。たしかに、その名に恥ぢず富士が見いの外大きく正面に見え、その右には雲海の上に、南アルプスが、白峯三山始め悉皆の如く連なっている。飯盛山の麓をまく、ほとんど平な樹入りを過ると右下に大日小屋がある。附近はみごとな樹林に囲まれ中々感じのよい小屋だ。水筒に水を入れ、しばらく休んでいく。やがて韮崎高校の生徒十数名が休日とまり、今日金峰甲武信方面に出発したと云う紙が貼ってある。小屋から少し行くと道が二つに分れている。どちらも大日岩に行くので右の道を行く。この附近、前側は大きな石柱の林であるが時期が遅いのか花は一つもない。小屋から三〇分ほどで、傷魂岩を真正面に見る大日岩頂下の平地に出る。ここにリックをおいてカメ

ラだけ持って少し丘にまいてから木の根等につかまって愉快に登ぢ岩頭の少し下の小平地に出る。こゝからの眺めは雄大である。金峰周上は直ぐ目近に見える石丈石が左右にかくたつている。御嶽の左には八ヶ岳が連り更に左に御岳、木曾駒、甲斐駒、白峯と連っている。一時間ばかり眺望を楽しんでから出発する。あまり長く休みすぎたせいか急に腹の調子が変になり、汗がだらく出る。途中で食事をしたが、全然食欲がない。力の入らぬ足を引ずって白花、石楠花の咲く砂礫や、雑木の坂上等を通り、徳松峠に出てから五丈石を仰ぎ乍ら、丁度十二時に頂上についた。頂上には四五人の青年がいて、甲府方面に降っていった。頂上については、甲武信の方はよく見える。中でも甲武信南面のガケが赤茶けて大きく見えた。一時間ほど休んで出発する。ガンコウラン、石楠等の間の道をだらく降って行くと、鉄山はいつの間にかまいて、朝日との鞍部に出る。体はますく悪化して疲れる事、おびただしい、二人にはげまされて、朝日迄につき、雨嵐も聞えて来るので休む間もなく出発。三十分で狭く峻高の峠、朝日峠につく。白樺の樹林下に平坦の主稜を越えると、あとは緩慢な上下の坂。丁度三時にだれもいない大笹の小屋に着いた。ふらくの体を床に止めていると、当間のピッケルを持った一人の青年が来た。今朝瑞牆を立ったこの事だった。夕方からは雨が降ったが、天気を心配する元気もなかった。夜はものすごく寒く、又ノのみしの攻撃に会いほとんど眠られなかった。

（以上　神島）

第三日　晴霧風強し

小屋（六、一〇）―国師岳（八、一五）―富士見（九、四五―九、五五）―甲武信岳（一一、〇五―一二、三五）―甲武信小屋（一二、三〇―一、三五水場往復十五分）―梁定路（一、四〇―一、五〇）―廻原風（三、四五）―乗鞍風（三、〇〇）―雁坂峠（四、〇五―四、四〇）―水晶山（五、〇〇―五、一〇）―雁峠（五、一〇）―笹取小屋（六、一〇）

今回の雨も何時しか止み雲の隙間に星が明滅している。もう三時半だ、夜のかすかな話声が絶って来るのを一人火を焚いていると云い知れぬ寂寞感に捕われて行く。禁生林の夜明け……

大時出発、海の如く禁生林の中を渡和からアルバイトが続く。神島さんの調子が思わしくない。鶯の鳴く石楠花の海をわけて遭難碑へ出ると待望の国師岳第一峯へは真近かだ。風が少し強くなったが、秋久最高峰北奥千丈岳の朝焼が光っている。頂から下ると右に北奥千丈岳への縦断ぎみ出る。リュックを下して朝露にぬれた道松をわけて北奥千丈岳の岩峰にたどりついた。此所はまだ石楠花の満開だ。展望はよく雲海の上に比ら浅間、妙高、白馬、八ヶ岳、木曾駒ヶ岳、甲斐駒、仙丈、北岳、富士の秀峰を朝日に輝き近く林立の甲武信、木賊、三宝山の肉等の高さで並び眼下に黒金山、乾徳山を見下し雲海の彼方になじみ深い御前山、大岳山さえ浮いている。秋久中最大の展望台であろう、カメラが三百六十度をねらう。

分岐附近は逆路が多い故水場があるから甲武信迄の水を用意した方が良い、国師岳へは近い。三角点から左すれば岩屋林道を経て梓山へ行く道、神島さんと別れて石の主脈を下る。長い下りが続く。何処迄も陰鬱なこめつがの原生林だ。静寂そのもの　少しも荒されたる形せきのない真の自然の姿だ。この神秘感こそ秩父特有の心のだろう、はるか下方に信州沢のせせらぎが聞える。いくつかの起伏を上下すると明るい富士見に出る。名の如く富士が美しい。木賊から飯出されて鶏冠山の岩峰に天然をそゝられつゝ再び処女林にもぐり込む。倒木が多い。頭上に白い鳥の群が赤鬼のように騒ぎたてていた。ガレ場に出ると甲武信の頂はもう眼前に迫っている。最後のアルバイトを突破すると甲武信の岩峰に立っていた。あっけない感がした。今迄の甲武信を右に経をとって、甲武岡嶺を行くのだ。時間が充分にあるので雁坂小屋迄と決め、睡眠不足の反を癒がし水の補給する必要があった。午后一時半風が強くなって来たので木賊の頂を敬遠して腰をまく事にする。甲武信小屋の番人もその存在を知らない踏跡が木賊の北側をまいている。用心しないと跡を見失い

すい。我々がこれを選んだのは時間的経路を見失いやすい、我々がこれを選んだのは時間的経路を見失いやすい、我々がこれを選んだのは時間的経路を見失いやすい、

日目からピッチをあげ三泊四日の記録となった。だいたいこの原因は二つあり、一つは費用を節約してもう一度山行を多くしたい事、一つは天気予報の不連続線の恐怖と毎日決って午后から来る雷雨との恐怖症によったもの、登山は陸上競技と異って長距離のみ目的ではなく、今回の山行にもペンダラーとしての色彩が充分でなかったとも云へる。然にしを失ってからは天候の恐れでものすごいピッチをあげた。笠取山の親父さんによると今年初の記録だとの事、雁峰ではスキーが出来るとか冬にでも訪れて行のお伴でも誘度路は賑まれている。

食欲がない時の用意に腹性の割食物が少かった点と共に腐生物質の不足から神為さんが途中下山の止むなきに至って了った。又食欲盛んなものは尽前に平げたのも一考を要する。尚登走には水を乏しい事は云う迄もなく水筒の水をのみ切って水場毎に補っていたがこれは次に水場がなかった場合や、始終水をのんでいると徒らに疲労を増すと予定地迄の距離に苦しくなる。殊に雲取一小屋間は二の岳がなかったではなく、水場では水場の水を充分にのみ、なるべく水筒の水を保持するようにしなければならない。無秩序を一般的に云へば低山と同様エチケットが乱れている。大地小屋の如きいたる所に「XX山岳会」「○○記念」等を彫りサイドを破り立派な指道標に彫り込んだりしてあるのは雄大な自然美の反面後悔であった。

今井君遭難について

三田　田中　将利

（この事件は他人山行のものであるが、今后今井君のみでなく我々全部員の反省すべき点大いなるものがある。私は参加していなくて真相はよく分らないが、本人が全快する迄に一応聞き出した事を報告する。或いは誤った点があるかも知れないからその点訂せられよ。

八月二十日（雨）

パーティ八名（今井、十時、鶴沢、雨宮、宮所小屋番、宿泊、サイド、天井大破の小屋であったため四時間しかねむれず、

夜務晴れる。

八月二十一日（雨）

雨が晴れたので鳥羽七時雲取山頂に立ったが、雨のため雲取小屋へ非難十時頃後に晴れ間を見て唐松林道を大ダワ林道に変更して奥多摩山岳会、異多摩山岳部のパーティと共に下る事にする。全員十三名　トップサード今井ラストのオーダーで大ワダ林道より日原新道に入る。本谷恐怖附近にて夕立とあり五時半のバスに乗ろうとピッチをあげる。しかし日原迄ゆずかう景窓谷出合附近ホニ鉄砲流し上流にて今井バランスを失い、スリップして約十米転落負傷打、鼻内出血し重傷、この時奥多摩山岳部のB田中氏今井救助のためネンザする。急いで日原へ急報遭難者はタンカにて護送され迅よく青梅バス会社専用のバスを借り氏川に運び手術を受ける。これが概要である。我部には全然報告もなく九月一日一部のものが報告を受取った始末で慰安に九月三日始めて岸田先生、笹野が行ったにすぎなかった。一方今井君の体も日々快復しているのは不幸の中でも喜ばしい事で

では何故このような事が起ったかと云う事を考えてみよう。

㈠　既成パーティ

この事は日本の遭難の中でも重大な教訓を示しているものだが、今井君の場合、他のパーティとの体力とパーティの統合が出来るか出来ないかを無視して合同したものらしい。一つ一つのパーティの性格が異る上に彼にはまれぬ技術をバスに間に合う様にして急いだ事が彼を精神的に疲労させたのではなかろうか、と云うのは雨の有との間を（約十米）短縮しようとした時スリップしたとの事である。

㈡　技　術

技術の至醇は川苔谷のみしかなくて日原の新道へ底意義に下りしかも急いだ事はまだ林道の様子について自己の力と比較して調べていなかったことであろう。

㈢　前夜の不眠

前夜ねむれた上に上出来の宮所小屋で一泊したのが不眠の原因で、こ

の不服は一重に接道ばかりさなくとも第二日目の行動にはフラフラする事は必然的なものである。

(四) 能

長鋼氏も強調している様に四月の接道を運動靴で歩行したことにも大いに原因していう。

――山岳部備品――

天幕(三人用)	二	ザイル(三〇米)
山刀	二	ノコギリ
カンテラ	二	コソフェル(大型)
オイルタンク	一	ハーナー
書籍若干		

なお部では今迄資材に不自由がうれていた本山の道具を今秋から少しづつ買集める予定です。又わづかながらの備品ではありますが広く一般の方に使っていただければ幸ひです。

M・T.

――各係割当――

今迄は主に笹野・田中(将)の両君によってなされておりました山岳部の運行も今後は新たに左記の如く各係を決定いたしましたので御了承願います。

C.L 笹野年夫
企画 平沢男
山口雄弘
田中将利
記録 野口弘生
会計 中野英司
餌係 鈴木輝夫
無線係 田中英
森沢拓治

山行報告

第三二回例会 甲武信ヶ岳

期日 十月二十三～二十四日

参加者 C.L田中(将)(2E)、S.L村田(2D)山口(2A)長崎(2D)鈴木(2E)中野(2E)竹内(2G)岩堀(1C)加藤(1D)

費用 川上―新宿一四〇、川上―梓山六〇、塩山―新宿八〇、計二八〇

行動経過

第一日 晴

川上―梓山。故障したバスに代ったトラックにゆられ、紅葉に彩られた男山を眺めながら、梓山白木屋の前でおろされる。

〈梓山―営林署〉 平坦な道である。荷が四貫足らずなので一応各自の調子を見る為と、日没が早いのを考えてピッチをあげる。石楠花山岳会の梢氏横豊高であるが、戦場ヶ原の姿がなさけない。営林署は多数の人が入っているから万一の場合の避難に都合が良い。

〈八丁坂〉 落葉松の澄んだ黄葉が美しい。山口の調子悪く、とにかくあと七一・九より派出された尾根のとりつきで昼食とし、山口のサックを中野に預け、中野の荷を分離各自負担とする。

〈十文字峠〉 山口の状態ますます悪く、パーティの二分を強ひられ先発隊のしを村田と長崎、鈴木、岩堀、加藤でパーティを編成日没前に小屋に着くべくただちに応援に引返すか先着が居た場合は救援を求める必要があった。十分后、後発隊田中、山口、中野、竹内のオーダーで出発するだけ悪理のない水に登攀める。梅の紅葉、林だけは朝吹川源頭におとらず美しさを見せている。

1950.12 発行, 彷徨 No.5

〈大山〉　山口非常に苦しそう。岩風のつゝうに気温の降下を驚く。
武信白岩山、秩父側上昇気流ものすごく日は傾いて来た。鞍部で先発隊を落伍した鈴木を加えてますます難行。相変らず有生林が美しい。倒木は切開かれている。

〈三宝山〉　登りに山口の体除々に改復に向って全員に元びの色が見えたが鈴木の疲労甚しくピッチは相変らず遅い。倒木少々あり、五時五分頂上着、日没となりあわてて甲武信に向う。山口の調子良くなって鈴木の荷を持ってくれた。暗の中を進む。鈴木の外にも疲労甚だしいものがあるので、ただ先発の応援が望まれる。甲武信との鞍部で左に沢径を分つのがやうやく判別出来る。

〈甲武信ケ岳―小屋〉
甲武信頂上に着くも迎え来ず、風が肌に痛い。月が白く木賊の肩に輝いている。ガレ場に注意しながら見望えのある小屋に歌声をあげる。結局先発も三十分早く到着したに過ぎなかった。

信濃川上（八四五）―梓山（一〇、〇〇）―砥林幕（一一、一〇）―昼食（一二、三五―一、二〇）―十文字峠頂（一、四五）―大山（二、四〇―二、五〇）武信白岩山（三、三五―三、四五）―三宝山（五、〇五）―甲武信岳（六、〇五）―甲武信小屋（六、三五）

第二日　晴后曇

紀行五時

〈木賊山〉　山腹を捲く。頂よりはしっかりと踏まれ倒木も切開かれている。出発の遅いのには時間的に気になってくる。破風山の偉容が美しく朝日に輝いている。富士もはっきりと浮び上っているが、笠雲がかかっているための午后からの天気が危まれる。三寸近くある霜を気持よく踏んでかけ下る。

〈破風山〉　破風小屋跡に休んだ後、花のない石楠花の路をわけて、一息に破風の頂上に立つ。朝日・国師・木賊・甲武信・三宝の主脈が真近に見え、浅間さえ山肌を見せている。ととのった径で歩き良い。一年の若堀がだんだんと山岳病の様子が見え出したので、荷物の半分を分解する。

〈雁坂峠―バラ平〉　指導標多い。草原のスロープの峠で昼食。岩磯の病状が重いため雲取山への縦走を打切り全員本瀬へ下る事にする。莫々と生える落葉松の森は、長早感し、本瀬への径は沢通しになる辺り少しく悪いが石楠花山岳会指導標にある新道通過不能も何事なく森に通れるようになっている。或ひは風化した花崗岩のガレ場を捲く旧道よりは良いかも知れない。バラ平の日原氏宅に寄り岩磯を寝かせてもらう。長崎村田を連絡にのこし後道を出発。

〈塩山迄〉　案の条ポッリ〳〵降り出したが、小降程度で止んだ。徳和から塩平をトラックに乗ったたの一人の落伍者もなく無事塩山着。日原氏宅に残った者は翌日無事帰京、岩磯も回復との事。

〔タイム〕　小屋（八、〇五）―縦走路（八、一五）―破風小屋跡（九、〇〇〜九、一〇）―西破風（九、四五―一〇、〇〇）―東破風（一〇、二二―一〇、二五）―雁坂峠（一一、二〇―一一、三〇）―雁坂峠（一一、四五―一一、〇五）―バラ平（四三〇―六、二〇）―三富（八、四五―九、〇〇）―トラック―塩平（九、四〇）―塩山（一〇、四五）

（雨にまかれなければ充分歩ける径であるため行動のみを記す）

〔后記〕

一部の参加者によっては、第一に計画が無謀であるとの声もあったが、私と山行を共にした者が少数ではあるが、参加者が私よりも体格が優れている者ばかりでもあるので無理があるとは思はれなかった。しかし決して良き山行であるとは云ひ得ない。これは私のパーティ編成に重大な落度があったからかも知れないが、計画を半ばで放棄し且つ二度迄もパーティを二分せねばならなかった事はそれの善悪は別として単に参加者の体力の考慮ばかりではなく、簡単な登山常識、殊に生活技術の考慮も大いに論ぜられてしかるべきである。確かに本年度に至って前例にない進歩をとげた。しかし知識面がその向上に伴っているかどうかは全く疑

向とする所だ。現在の様な白紙同様な所にわずかな墨が付いた程度で、尚も中山・高山への山行を続けるならば、まして二年間に赤たるべき新制中卒者のみの部が、このような山行を続けるならば、それはとりかえしのつかぬ悲劇をもたらすであろう事は明らかである。

私は此所に部の行方を基礎に向ける事を云ひたい。基盤が拡大であってこそ、新しき進歩が発見されるであろう。冬山が叫ばれるよりも、先づ基礎へ、フリダシへもどってもらいたい。高尾山でも良い。高水山でも良い。そして共にのびて行かうではないか。その中に自然に親しまうとする新しい若き生命を発見したいものである。ファイト、ファイトこそ我々のかくべからざるものであり、反省こそ忘れてはならぬものである。（この山行を顧み、そして強き反省を求めるものである。（M・T）

1950.12 彷徨 No.5

新委員招介

S.L.C.L. 田中将利

〃 S.L. 村田博之

〃 山口雄弘

〃 中野英司

1951.5 彷徨 No.6

退部者

元C.L.田中将利君は二月一〇日をもって退部いたしました。

新リーダー

二月一〇日の選挙の結果、S.Lが四人同票となりましたが、特に二年生を選び左の如く決定。

C.L. 三A中野英司

S.L 三B村田博之　S.L 二B加藤鈴夫

（カロー谷）

〔期　日〕九月二二～二四日

〔参加者〕L村田(2D)　森沢(2B)　名倉(2E)　田中(将)(2E)　他四

第一日　曇

氷川（后九尚五）―日原（一二・〇五）―（石山神社（一三・二五）野宿

第二日　晴后曇

神社（六・一五）―カロー谷出合（六・四五―七・一〇）―杓子窪出合（七・五五）―二股（一〇・一〇―一〇・四〇）―大滝（一〇・四五―一一・〇〇）―天目山下（一二・〇〇―一二・三〇）―仙元峠（一・〇五―一・二〇）―踊平（三・二〇）　泰宮

田中（将）のみ急用の為下山

踊平発（三・三五）―獅子口小屋（三・四〇）―曲ヶ谷沢出合（四・一〇）―川井（五・三五）

第三日　雨

踊平―川苔山―鳩ノ巣

思ったより簡単でリズミカルに歩ける谷である。やはり小川谷本谷のような味だが、たゞ初心者が多かった為に日―から杓子窪の間の廊下の一部を巻いたのが残念であった。大滝はすばらしいが何と云っても水量に乏しいのが最大の欠点であろう。一杯水は今年も水がない。仙元峠は絶景をそっるが南面だけの展望が惜しい。

山の高低の見方

山を恋うる心、山へ登る目的、山に求めるものは各々個人によって多少の異があると思う。山の高低の見方にしても同様と思はれるので、此所に一部意見を発表してもらった(編君)

○ PEAKの征服　2E 鈴木輝夫

山に大自然を求め、自然に親しまうとする人は大体低山を求める様である。これに反して大自然を求め、山を征服して我物にしようとする気持を持った人は低山から高山(北ア、南ア)に挑戦するであろう。

私は高山趣味を好む。何故ならば現在の青年は山へ遊びに行くだけである。一部の人達を除けば彼等の山でなすしたずらは先日の谷川岳の遭難の如き、間接殺人すらするのだ。我々は山へ遊びに行くような気持で登山してはならない。

昔人類が恐ろしいものがいると感じた山に登った時の気持、それは、あの山を征服しようと云う気持であったろう。この気持を受けついで、我々も「山を征服」しようとする気持で登らねばならぬ。

○ ヒマラヤへの尾根　2E 田中実

文明の社会から逃れんとする私は異国から自然を愛する。しかし自然を超越した社会をどこかに見出すことが出来るだろう。否、不可能なことであるということは私に低山と高山の限界を自然の中から検出することが出来ないからだ……。

山に対して、完全なる人間性を持ったとき、高山においては社会より逃れんことにより異の社会の美しさを知り、人間同志の友情を育てあげるのではないだろうか……自然は低山をもって人生を明るくし、高山をもって山に生きんとすることにある……。

諸君、私は低山・高山の区別なく我々若き者に対する死への指導標を立てた山をもって高山となし、且、それを好み、高尾山、丹沢山、雲取山、谷川岳、北岳、穂高等はいざ知らず、ヒマラヤに通ずる最悪の尾根だと呼ぼうではないか。

○ 足もとに御注意　2E 田中将利

私の考えているすべてを此所でぶちまけて論議を始めたくはない。たゞ一つ私が高山主義の主張者でもなければ、低山論の容認者でもないと云う事を云ひたい。高山、中山、低山がどの様にして区別されるかもはっきり知らない。山高きが故に技術を要するとか、高きが故に良とかは甚だ疑問とする所である。アルピニストの登高技術も真に自然に対する愛以外のものであったならば、無に等しいのである。低山の術程も単に容易さのみをもって可とするものを除けば、すべての登山者に愛されねばならぬべきものである。

我々の中にはスリルとか、緊迫感とか、征服感とか或ひは雄大無比の展望異等の魅惑にあまりにも溺れすぎて、美の山を恋うる心、の根本的なものに気がつかずにいるのが多い。

山頂に立ち、帝冠ぶりとばり「自然を征服した」と感へ、それを以って満足する人、は、もう一度、振り返って見るべきである。あまり、山頂を気にして足元に気が付きませんか。

1952.05 発行，彷徨 No.9

公式山行第四六回 多摩川南陵縦走

一、概要・目的

西高山岳部が、この二三年間基盤確立以来等比級数的に発展している事は衆目の一致するところである。又部の主眼がパーティシップと生活技術に向けられていると云う事も、今を放す因となった事大であると云わねばならない。

しかるに部の主力たる二年の成業を見れば貧弱、二年にかわって意気旺盛な一年部員が一九五二年度の主力にならねばならない。単に自己の山行のみならず次代の一年をひきいて行かねばならぬ立場にあるわけである。

一般に中学には登山と云うスポーツ団体はない。新人はましろ全くの白紙である。それが今年のみに限らず、六三三制が発足されぬかぎり、人部以来わずか一ケ年の二年部員が部の安定せる山行を作り指揮して行かねばならぬ。それ程困難な条件の中に一年部員の夏山縦走参加はわずか二名と云う結果が付随している。これによって次代主力となる一二年の中堅はいぎゃっが存在しているのである。勿論最低線は白紙に等しい。新人を迎える四月迄に此術を何とかせねばならぬ。こう考え出したのが(イ)(ロ)(ハ)十一月の末であったと思う。

再は(イ)メンバーシップ・リーダーシップの強化の事ある事。(ロ)基本生活技術を習得する事にある。これには登山以外にはないが、三十名に近い参加予定者に備うべき装備がない。スキーにはコーチャーと金がない。最后に残ったのが冬期の縦走で、これより外に持駒はなくなったのである。

二、計画ならびにその経過

初頭に会(九月)によって三月末の頭首脳縦走案が組まれた。

玉川――高尾山――笹尾根(2)――三頭山――月夜見山(2)――大岳山――御岳

これは山十名と見る準備要にして、変装度を失うため、次行前長期間の準備トレーニングを必要とするメンバーシップの強化の意味で全く未知のヤブ尾根を有する第二案を作る事にした。又陵線の関係から全部三幕(東京テントより借用)を使用するものとした。

塩山――丸川峠――クニウチゴテンタル(C1)――篠――大菩薩峠――石丸峠――牛ノ根――大ダワ(C2)――奈良倉山――ツル峠――三頭山(C3)――大岳山――日の出山(C4)――青梅　最終日は一般生徒の参加によるハイキングとしたが后に大ダワ峠にて合同大岳山と、クニウチゴテンタルを唐松と改正された。

十二月中旬に田中幹利がCLに決定され、事に隊員数十六名としての研究会に入り、実行に入った。

資料不足のため、牛の根の分水陵偵察並びに予想概算量約百二十貫中約半貫をC2(大ダワ)予定地点にあげる事があり、三隊を出して施行した。

一月上旬に数次の研究会及準備会が繰返行はれ、縦走隊員の選定により十六人分の金計者が見られ、一度二年は手を引き二三年に計画通りによる準備を行はしめた。

総指揮　加藤(2)(1月1日より)　岩瀬(2)(病)

幹事係　福田(1)　斉藤(1)　関谷(1)　川村(1)　多田(1)

食糧係　林(1)　佐藤(2)　下出(1)

燃料係　松崎(2)

(計画　飯塚(1)

トレーニングは一二年指導の為行はれおおった。三月はこの間タツ子せず、三月七日卒業式の日におって準備が全然出来ていないのを知った。その上十三日の準備会に至り大量の不参加者が出来、参加者の半数が三年(新OB)となった

—12—

てしまった。これにより生ずる種々の條件からC.Lが怒って一時計画案を宣言したが熟慮の結果あるため最新人の参加を認め、パーティをどうやら縱走が出来るだけの編成に(雑談)組直した。このため全計画は根本に還元出発迄の一週間に超スピードの計算(行動時間と突破可能性、食料、燃料)の繰り返しを行はねばならず参謀等はたりまわってようやく出発日にそろった様なものである。

この間の研究会にも出席者は不参加者を含めても以下三名と言う惨状であった。

出発日の廿日、ようやく疲れた我の縱走隊が出来上ったが十九日に計画の出された数隊に対しては作業を与えるひまも全くなかったのである。又同時に林がケガで脱落する等やぶれかぶれのまま山の食糧頭を痛めつつ新宿を発ったのである。(2)の食料が無事だったのは奇跡と云うべきにや、

三、実行

(1) A隊(縱走隊)とC隊(大ダラ峠)との連絡は廿四日午后0時合同する予定とし若し午后一時までに合隊不着の場合はA隊より独立し独自の行動をとるものとし、その連絡に努む。当日雨天の場合はC隊は独自の山行を行うものとした。B隊(教員隊)との連絡は成行的なものとしたが教員隊に連絡第を置く事と、A隊の三峰西峰出発(八〇〇)を早めただけで具体的な打合せを行ったのみはおかった。

(2) A隊は行動時間を種々の資料より大時間を好ましいものとし七時間を限界とした。体調は雨又は雪の場合としそれ以外の時(降雪)であっても行動するものとした。

(3) C隊は食料に(約四日食分あり)盗難のおった場合には隊員の生活をもって継走を続行させ他の生活をもって小菅人下らしめ村長面接の上緊急食料を購入、ツル峠にて合同させるものとした。(ツル峠にて)

(4) 縱走を先に云えばA山行全隊は部員の生活及上の活動を見たにもかかわらず部の総力をあげての山行ではなく最も無知能的な山行に終ったのである。結果は出発前にすでに現れていたのである。

(C.L 田中拓利)

偵察・荷上行動

オ一隊 岩堀(2) 鈴木(3) 斉藤(1) 奥谷(1)

目的……(1)勝縁荘との連絡、(2)牛の根陸線の偵察並びに標識設置

オ二隊 維田(3) 加藤(2) 松崎(2)

目的……(1)小菅村との連絡 (2)全重量百三十貫中約廿貫の荷上げ。

オ三隊 田中(拓)(3) 平澤(貞)(3)

目的……氷川での連絡。(オ一、オ二隊との)

◎オ一隊、オ二隊は合水陸大ダワにて廿四日午前七時合同し後オ二隊とのドッキングし東面のルートを合同偵察するものとす。

◎オ三隊はオ一、オ二隊氷川帰着後合流荘にて総合検討を行うものとす。

ボッカ品 乾飯(三升)、カンパン(四貫)、ミルク(一ポンド)、鮭(一缶)、ガソリン(ガロン)、炭俵(廿三)、その他 計 廿貫匁

十六時半のみで帰してしまった。木川山荘でオ一二隊の先輩と会ひ、情報の報告を受けて、宿舎につく。宿泊者は二十六日学校で行はれた。

◎以上の結果により大マドイ山東面の陵上は全く未知のまゝ決行する事とした。

縦走

パーティ参加者

CL 田中(秀)(三)

A隊オ一隊L 田中(実)(三) 斉藤(二) 下山(二) 飯塚(二)

オ二隊L 加藤(三) 川村(二) 高橋(二)

オ三隊L 中野(三) 鴻池(三) 岡谷(二)

CL 田中マ

B隊L 福田(二) 平沢(三) 長崎(三) 笹田(三)

C隊L 中川(OB) 笹野 富田 林 山口 南波 横川(以上OB)

佐藤信(三)同(充)(三) 同(忠)(二) 岩堀(二) 外二名

総計 二十七名

図A隊装備

品名	計	部備	個備	備考
テント四人用	千	1	3	夏用、東京テントより借用
ストック	3	0	3	ワカンと併用
ワカン	3	3		
ピッケル	3	0	3	
ラジウス	2	0	2	
バーナー	3	3	0	
コンロ(プリミドロ)	2	2	0	

団体装備(器具)

| | | |

主食			副食																			主食盗品
乾飯	パンパン	コッペパン	馬令薯	乾馬令薯	ずいき	とろろこぶ	ベーコン	バター	ミルク	ジャム	ウドン粉	さつまあげ	煮わかめ	ホウレン草	人参	めごし	かたくり粉	味噌	塩・とうがらし	餅
5升2合	4貫600匁	17ケ	700匁	2貫	200匁	200匁	500匁	2ポンド半	1ポンド	200匁	200匁	45枚	6把	6把	3本	11把	5包	800匁	若干	6升
ここに3升荷上げ	ここに4貫荷上げ			使用せず、非常食													非常食・全部残る。			

◎第一隊第一日負荷量並びに第六年度公式山行参加状態

氏名		出発日の体重(貫)	負荷 負荷量(〃)	負荷経験	増減	加参(第六年)公式山行																入部来の山行日数
						四月	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	
						川苔山(系中外部)	大岳山	永無沢	奥秩父主脈	八ツ島	塔ヶ岳(系中)	リリヲ岩	大ボサリ峠	御家	七ツ石山	川苔山						
田中(柳)		12.0	7.3	8.3	−	〈		○	○		○			○		〉						43
田中(熱)		13.5	7.2	7.5	−	○			○		○											41
下出		14.0	5.6	3.5	+		○	○	○	○	○		○			○						16
斉藤		14.2	5.4	5.5	+		○	○	○				○	○		○						15
塚	俊	17.0	5.6	4.5	+						○				○							8
藤	加	15.0	6.8	7.0	−	○		○	○		○		○	○	○							27
村	川	12.0	4.7	3.5	+		○				○				○							9
橋	高	15.5	5.0	0	+																	4
野	中	14.0	6.5	4.5	+	○			○													29
谷	興	12.2	6.2	5.5	+	○		○	○	○	○		○	○		○						30
池	瀧		5.5	0	+																	8

A隊行動

第一日　三月廿日　夜行軍　[illegible]

第二日　温山(三一五)〜三国峠(九四〇)〜[illegible](九四〇〜[illegible])〜アシクラ沢(八二五〜八四〇)〜アイヒン(九三〇〜九四〇)〜大休止(一〇〇五〜一〇〇五)〜一〇二〇〜[illegible](一〇四〇)〜[illegible]峠、P三国峠(一)〜上日川峠P一(一一〇五)〜[illegible](一一二五)〜(P一下)、斎藤、[illegible]、田中、マザルク(炊事地点)(一一二〇)〜上日川峠(一二三〇)〜C1地点(一三三五)

過去何回か足を印したことのある温山峠に下車。四五人忘れものをした弁当を[illegible]て荷物をまとめこP1をトップに総勢十一人元気いっぱい出発。空には星がまたたき明日の天気を約束している様だ。歩きなれた道なので懐中電灯も無しにどん〜〜進む。三十分に五分の休憩をとりながら進む。途中腹がすいたと云う為があるのでみ部分の者が軽い食事をとる。この頃より半月がようやくはじめ空を下ってゆく。だんだん平坦な道が続くかと思ったらまたきつい坂だ。川田隊長を過ぎて[illegible]より雪の深さが増してきて来た。皆もくく〜と歩く。[illegible]の山竹も過ぎ夜もすっかり明けたころ[illegible]。ここで朝食をとり[illegible]を進めていよ〜〜雪の大[illegible]をめざして出発、天気は上々。初めは[illegible]に歩いていたが、だん〜〜と急坂になるにつれて背負いの荷物がこたえてきたのか、一歩一歩急坂をとる。アシクラ沢もすぎ後がウネ〜〜とうねり[illegible]より雪が少しずゝ残れる。朝もまだ早いので雪面はクラストしているのでアイゼンを行ける。この頃より[illegible]が多少苦しそうだ。上日川峠も間近くなった頃、[illegible]の[illegible]を[illegible]、手もしびれたと云うので[illegible]の荷物を運いたまゝ出発しP一が先に上日川峠迄行って荷物を取りに引き返すことになる、このあたりより雪が約一尺位あり、ぶすぶすもぐって歩きにくい。上日川峠にて昼食をとる。CLから今日の行動を午後一時迄として明朝来だクラブストしているうちに大等級をきわめようとの計画が発表され行けるだけ前迄行ってC1を建設することになる。ラッセルは時として[illegible]までとなる。ワカンはP二隊がつけたが思うように効果がない。峠からいくらも歩かない地点にて一日の目的地迄にはまだかなりの距離があったが明日に備えて行動を中止しC1を建設することになる。直ちにP一隊田中、(ミ)飯塚の両名はルートと雪質の偵察に出発。P二隊P一隊残はC1の建設に加り、P三隊は食当と共に水くみの指揮に行く。やがてまだ日も沈まないうちに夕食のカレーライスも出来上がる。(斉藤)

食事一六二五　入床(一八三〇〜一九〇〇)

天候　日中快晴　夜間一八〇〇〜二〇〇〇晴　二〇〇〇ガス　二三〇〇あら風強小雪　〇〇〇〇快晴

気温　最低マイナス十度(第四天〇〇)

廿二日　三月廿一日

食当〇一〇〇起床　(給食〇三〇〇　食事〇三〇〇)

C1撤収(〇六四〇)〜休止(〇八〇五〜〇八二五)〜妙見(〇八五〇〜〇九〇五)〜(〇九一五〜〇九二〇)〜妙見(〇九三〇〜〇九四〇)〜峠茶屋(〇九五〜一〇一五〜一一〇〇)〜天狗棚山(一一一五〜一一三五)〜石丸峠(一一四〇〜一三一〇)〜石丸峠南斜(一三四〇〜一三五〇)〜川入(一五二〇〜一五三〇)〜非常食(一六四五〜一六五五)〜大谷ワ(一九二〇)C2

食当オ二隊　夜食二三〇〇入床二四〇〇　ボッカ品平数発掘

朝三時に起床あたりはまだ暗闇だ。凍えい夜空一面に今日一日晴天ですよ。と云わんばかりに星がきらめいている。[illegible]の朝食

る。クツがこほって岩がいと出発がやゝおくれる。小氷嶺よくウインドクラストしているので快調に進む。一面の雪氷である。急斜面にアイゼンのツアッケが利く。沙見まで斜めに登り荷を置いてふわり〳〵と登ってゆく。雪荒が一氷山上も雪ノ川側に出こいる。積雪七八尺。それから約五十分にわたってゆるやかな尾根を下ったりとったりして大菩薩峠に来た。此所で中食のパンにジャムをつけバターきかじる。この味は壮にこたえて実に何とも云えない。コッペ一個ずつもらう。この時は最も時らしい時で云はゞ峠の頂合と云った感である。今までのアルバイトに対する報酬としては実に過ぎた時程であった。天狗岳山へは嶮岨ものすごい雪である。秋冬帯と巨塔して（時間時に）二歩一歩腰までもぐる。時にしては胸までもぐる仕末となった。偵察のつけた赤い標杆もぐ両ケ所〳〵でたどるのでさえ困難である。雪深ちゃは此当のアルバイト上しいられ。ふぶきしが才一隊の前に立ち部隊する。右に岩。があり左にさけて疲を切って突進。ピッケル・ストック、鋼スタ瓦中ゆえのを横にしての雪泳ぎ一時間遂に頂に立った。はってはもがき、もがいては泳ぐ湿雪の一時間であった。此所から右丸峰へのカヤトの下りも湿雪がヘソまで来るもので遂に三十分間に食糧をトップに交互チェンジした。一旦右丸峰の鞍部に上り分水稜人直接に下降する。半ノ根にがっからば道は急な下りとなりズス〳〵と腰までもぐり赤布はなか〳〵見えず一足毎に背中の荷が強く肩に喰い込んで非常にだるく足に大理石の鉛をはいたようであった。積雪深く意外な時間を食う。時程は一時〇〇米前近まであり、疲労すること甚しい。たゞ尾根でたいに大マドイ山のガレをのぞみながら徐々と大タワへ向って行く。五時非常食をとり元気をつける。途中日はとっぷりと暮れてしまった。もう赤片を落見する事は困難で、だゞっ広に半ノ根の稜線を急斜度に

横断しつゝ進む。雪のあかりでさぐ〳〵電灯なしで歩いて行ったが終いに枯木を焚きまわかえてバテた気分をふっとばしてしまった笑われぬ悲劇もあり灯が世話となった。雪荒のぼやっとした光は濡れたスリッパから来る陰気をニ尸寒く身に感じた。カリバを過ぎ、暗闇の中に陵を矢してトップが土嚢側に入りかけたが一旦停止、足ぶみさせている間に偵察出た西藤、斉藤下出からルートの確認並びに小ヤ発見のヨッホが来る。つい目の前であった。声をかけ合ひ耐まし〳〵ぜんぱってホヤへついた。屋根の一部と柱のみのホヤである。才三隊は直ちに敗者に分ッリ才二隊は全力でボッカうめておいた食料を運ぶ。三ケ所は安全であったことが確認された。山を登る人々の純にしこ清らかな心に強く感心させられた次第である。（高橋）

交食三三〇〇、加藤軍い深傷にやられる。

才三日　三月廿三日

夜半ヒより降り出した雪は四時半頃までに大七寸降り、明けゆく中に極ノ暴風山も北の越倉山も猛襲に吹荒いている。此の強い三日は昨夜雪が降ったとは思われない程の上天気である。食事いきなり偵察中止出発と云われたされ食当の才三隊は中野さんが一人でおじやを作っている。うまいうまいの感覚の

うちにおぢやはたちまち荒切れとなる。昨夜堀表した二ケ所のボッカ岳を掘り出したがこれも無事であった。この作業でやゝ出発がおくれたが金賀新雪をふんだの出発が始つた。新雪に屋根の下にテントを張ってよかったなと雑かゞ云う。大マディ山きは新林中をトップ五分交たりで進む。平坦な度でキジ打ちの一隊が解放される。キジ打ちの一隊により南斜面には雪が殆んどないと報告され我々は南斜面を直進することにする。陵線より三〇米下方を南斜面に小径を発見して中野さんがザックを置いて偵察する。「おりて来い」との報告に不安定な降下が始まる。径はかなりはっきりとついていて雪も昨夜の新雪がわずかに積っているのみであった。二つのピークを巻くと再び陵上にのり上げこれる。陵線上の雪はすでにさっと上の上までキズ一ブッシュと共に歩行困難、殊にキスリンのサイドにあるホールとがやま。南に再び踏跡を発見して田中実さんの偵察の結果、これを辿ることにし、山地帯の手前の南から陵へもどり安定で三三分。一方は一方は続いているがブッシュ抵しく新金田中や中・偵察をしかし陵へ戻りかけるが、道中朝食にまたがって割目にまった雪どけ水を溜め後に沢を登る。三時半頃に中食を済ませ、カンパンとベーコンに加えるに雪とかして水とした。もうだがおそまつ。ものだが金旅庭盛がより早くかたずく。ルずかに十五分の休憩に中食がおえた。ひどい天候の雪になやまされながらようやく稼ぎ出ることが出来て最晩ホッと本完する。山の神肩の附近であろう。山人の発による。この辺は北面斜面がまくたわた雪崩に向いくらい積雪であるとのことだった。雪になやまされるのは三兎とカラ多の沢沿ひの下降にかゝる積雪はかなりあるが最晩人夫が通っているのでラッセルの必要がなく径ははっきり。周囲は五尺以上の雪はある。四時頃あまりの振動にたえかねて雪沢さんのリュックのベルトが切れた。そばうどん雪もなくなり土を踏まこの沢にかい立ち雪どけの水をがぶ〜のみ。ちらついた小雪も止み山天の金流夜でサックの感覚のためおくれた鶴池さんと中野田井さんが追いつきますますピッチをあげる。階段上のワサビ畑も好く好く人里に近ずくと人家の台所のにおいが鼻につく。山之家を過ぎ最後をリルッ峠へと上りかけるころはパラついた雪も止み晴くなりかける。大白沢の流量もくり小滝を見せている。鶴峠より二km位手前どろう河原にテントを張る事に決定P2はすぐ食事の用意P1&P3はテントの設営に取りかゝる。テントの支柱を折ったP3は食庫のテントを張る。ちゃんと食って荷を軽くしろとのCLの命令でたちまち大鍋の底が見える。平沢さんの心からのおくりものミルクも加かれる。久しぶりに川の水もうまいこの山行で一番たのしいキャンプだった。昨日の中食の食糧を予備食のニギリメシに作るため夜半までかゝる。三三〇頃P2からテント火事あり。（岡　松）

金田沢晴　一六三〇頃　最回吹雪くのみ

第四日　食糧〇二〇〇　部炭〇三〇〇　食事〇三一〇

〇三〇(〇六〇〇)—鶴峠(〇六四五)—小桃山手前P2(〇八二〇〜〇八三五)

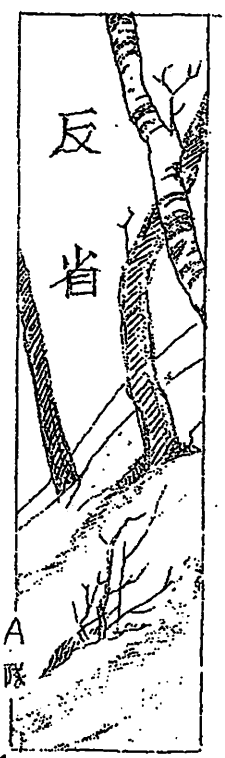
小桃山(〇八五五〜〇八五八)—休止(〇九三五〜〇九四五)—四P五(一〇〇五〜一〇一五中間食　数馬隊〇八二〇迎)—三頭岳(一〇二五　光光山加蔵一〇二六　後一〇四〇)—後冷鞘口峠(一二一五〜一二一八)—耳張峠(一三四〇〜一五〇〇中食、この間光光峠は月々兎山北にあり金属掌握に約一時間を要する)—日指(一五五〇—河内(一六四〇)—水川部落

峠頭一三〇〇〜一五〇〇まで最回吹雪く

テント火事や村の酔っぱらいの来訪におびやかされた夜もようやく明け六時に予定より二時間おくれて出発。荷馬車の通れる位広いつま先上りの道を歩み鹿峠に着く。峠から三頭山への径は千八百米附近まで長作の装備が入っていた。尾根が最初に東方へ九十度折れる所で径をさけて陸上に出、ブッシュの中を登る。雪は南面にはあまり多いが一歩北面は殆んど氷結しているので歩くらいまでもぐり非常に歩きにくい。予定より相当おくれているので後続隊と連絡すべくピッチをあげる。小棚山の一つ手前のピークでヨッホをおくる。正に八時廿分。陸上と思実にたどる。積雪約四尺。やがて三頭西峯の二つ手前のピークで後続隊の残して行った道標を発見する。タイムは八時廿分とある。後続隊と約三時間のへだたりがあるのを知ってがっかりする。三頭山で実に一枚の連絡紙を発見した。バテたり腹をこわしたりしている者がまりたためC隊と連絡は不可能と考へ、約三時間の差のある B隊によって何らかの連絡がなせるものと判断し、元気の良いもの四名に物資を直ちに瓦張峠に急派し、御前山登路を歩んでいるであろうB隊に連絡するために出発させる。後発は荷のせいりの上出発。朝までクラストしていたのであろうか後続隊の人々のもぐっていない足跡と目あてい一歩一歩もぐりつゝ進む。重荷の後発の中でも一倍重い丁など一歩一歩膝まで埋っている。他人の穴へ落ちればヘソまでもぐる。軽荷の者はもぐっていない。後発隊が瓦張峠へついた時は先発の連中はいず、瓦張峠までの順番を無視している。CLがかけあしで月夜見山東側でうろ〳〵している先発を見つけ瓦張峠へつれもどした。この間約一時間で先発の連中は瓦張峠の位置がわからなかったのだと云う。軽度の凍傷一、腹痛二バテレックス数名でヴィバークして御岳まで行く事は 目の前に大岳を見ていながら明日の行動にさしつかえのない者が四人以下になるのが明らかな状態であった。たし、目的を達する事はたしかに大事な事であるが御

けぬ様な意志の弱い者を無理させてまで強行する様な価はないものである。田中謙 やっとカンパンの昼食をとる。天候もあやしくなり遠く山々が瓦雪にたゝかれているのを見て縦走をやめて全員一行動をとるべく命令として派山する事に決定し瓦張峠から日者の部落を通り小河内村に下りバスで氷川に出る。ほとんどのものがピッコを引いて居りキスリングがこわれたと云ったものや折れたストックをかゝえている者など相当の疲労を呈していた。

（青藤）



第一日

北朝の対象となる大きな問題にぶつかれば良いわけであるが、私は例によってごくありふれた事から書いて行く。勿論これは私が山に登る限り強調する事となるであろう。

最後すべり出す列車を握手でおくってくれた多数部員の心温まる友情が出発前の準備期間にその十分の一でも向けられていたら縦走隊員たゝる肉体的精神的負担は解消されていたであろう。今後とも山に於ける共同生活のものを実社会に於いて協同朝ち調和の形で多少とも養っていただきたい、度々校庭で行っているテント宿泊も結局は融合をはかる一助にすぎないのである。ここ各自の出発時当時の負荷量を我々の過去の負荷量と比べてみるに十一人中八人が彼等が としてはじめの最初の負担があり、しかもその中には初めてかつぐ者が二人も居た。重量としては各山の最少限であったが、こゝらに自己の能力

を感ずる。精神的弱みを吐く傾向が見られるのは、ハテても、シビレテも沈黙を守るよりもリーダーの不安となるであろう。その点で心配説得させた。一日目特に裂石迄の行程を難なく通過した事は結局精神的内的的闘争に打ち勝ったのである。　歩行中声を掛け合う事は実に心強い。元気なほど腹の底から太い若々しい声を出して隣友を励ますものである。バテている者はたまに口先で吐き出す様な声しか出ない。どうこうものか我々の山岳部は声が聞こえない。これは本年度の全部員が久々一大反省であると思う。山家炭焼き等に逢った際はどなりつける様に「ヨイウ！」と云う習慣が欲しい。

今日の行動は小休止を取り過ぎた。三十分に一回の予定が二十分以内に一回の割で行われていた。ラッセル中はともかく、ミクラ沢出合辺りまでは、もっと思らすべき行程である。P1によって問題として行動時間と小休止時間の配合である。

第一日は別に行動について、又個人について批判となる点は見受けられない様であるが最後に幕営地に関する問題故に今日の行動をここでおわったかと云う事、これが問題となる。結局は今日の失敗が縦走を実行する事が出来ない原因となったのである。私は以外な積雪と云う前にCLはこの山を世見ぬきいる隊員の状態を知らなかったのではないかと思う。しかも私はCLの云う行動時間の限界がギ問であった。まとめて云うならば、CLは楽観的観測に固定させられ、私が考える範囲では、CLは二日目において自分の観測の誤りを知ったのではないかと思う。そうでありとすればこの縦走は出発前から実施出来ない事に定まっていたものと私は観測する。少なくともCLは天候から見ても、隊員の状態から見ても、あと二時間半は充分動かすべきであったろう。　この問題に関し、以上申私の見方としておきたい。

幕営・食当・偵察は午後二時の太陽に照らされて記録的な速さだった。しかし食後の火たき後かたづけと称して出るもの（三年生）又も[illegible]にそれをやらずに腰でしまった事は、ダイマンと云うより共同生活のあり方を全然身につけていないとしか思われない。ふりーダーも命令すべき筈だ。

（P1山田中　見）

第二日

今日の行動時間が長くなったのは主な原因としては熊沢山（天狗棚山）の[illegible]もぐるべタ雪と半の峰の荒外な積雪量並びに身疲におびやかされた事によって時間をとった事が原因していると思う。天狗棚山は昼になっていたとめしまって居らず荷物が重いのに加えて脚までもぐり苦労した。

他の原因としては出発のおそかった事（約一時間半の遅れ）休憩時間の長かったこと、湿雪に足を奪さぬ様に気を使って精神的疲労が肉体的疲労と相まってバテた様であった。ふりーメーの隊員不統一。標識布の不足等。

行動時間を長くして迄も目的地に行くべきか？

（加藤　鈴夫）

第三日

一、第三日目の出発時間のおそかった事。これは前夜の到着がおそくCL田中が明日は帰宅し大マテイ山の偵察と云って寝てしまった。為に朝食の食当P3が六時にたっきおこされて、あわてて支仕にとりかかったしまつ。又昨年末に拵めた乾パンは一部しか昨夜焼らなかったため残余を翌ほった事、この二点が出発のおくれた原因である。

二、三日目の行動尾根は昨年偵察もれになった所であったためルートの選択に時間を多く費した。更に尾根の雪が低いためにくさっており腰の深さのラッセルに全員が苦しんだ。しかしこの日のトップラッセラーは前日の如く交代がスムースに行かず一部の者部ラ各パーティのリーダーが行動でおり各

パーティのCは隊員が疲労して今日のラッセルとする見込のない事を判断した為である。更にこの日目立った事は第一日目、第二日目に比し各人の携つ荷物の量にかなりの差が出来た事である。つまり多くの荷にあえぐの可各パーティともしで、このCが大部分の行程のトップラッセラーとなったのである。思い切ってこの日は停滞と殺人の回数を減ずる方が良くはなかったかと思うのである。

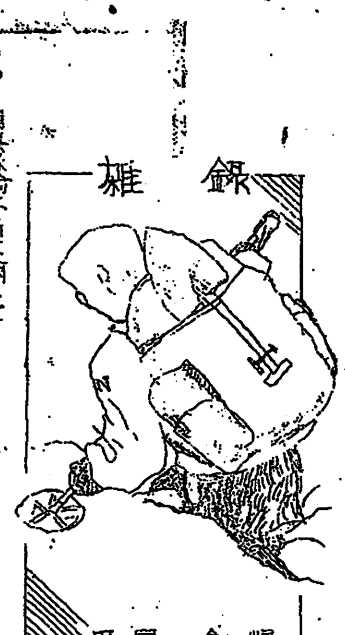
（主　樵　義　司）

第四日

第一日の様相、第二日の苦闘は第三日に至り停滞すくつがえす結果となり午后四時就寝路を放棄しなければならぬ状態となった。第四日目遂跡を絶った断ですら未だ救援隊に合流出来て、御岳山まで到達すると云うCLの稍体的見解を隊員が信じていたのである。地図を開いてくれ、隊員は第四日目の行程を全てこの山行から体験して三頭から御岳又は日和田山に歩けると思っていたのか、勿論そのファイトを賞したい。

凡遭難を知らない先発隊連絡隊が、そこまで戻されしかもそこで就寝を打切ったみじめさは絶対さけ得べきであった。即ちその原因である四日目の就寝を敢行と断いしかも今日は救援隊氷川隊と連絡をとるとCLは断言した。隊員としては以張隊でUヴァークして続行せんかとCLに問はれてためらとしか云えないのがあたりまえと云って良いくらいであろう。又燃料を切らした件は使わないガソリンをわざわざ悩ってまで抜かえらずとも上日川峠、大多和　小菅村で必ず求めておくべきであった。

鷹巣で疲労して落ったを事に直面する事態を考えず希望を里に向けていたのだろうか。鷹巣から脱出したいと云うものも良い事だし三頭の頂で後発隊を作らねばならない状態となった時、直ちにC4地点を指命して救援隊に対しては停滞隊を作る事が最善の處置であった事と思う。又一二年隊員も三日ぐらいの停滞



◎○　偵察隊荷上品に関して

心配しごいた食糧カンパン、炭の含量度の問題は、不可思議な程何の変化も見られず、温気は殆んどなく快的に使用出来た。方法は前述の通りで他パーティにもおすすめしたい。餅については実験用として十一月から用意してあったのを心なき部員の目の中におさまってしまったのは所謂心残りなるものとしてはうらんでもあきらめる事であった。断理器に使用した炭俵も乾燥していてマットとして充分な効果を上げ得たと思うが、たゞ一つガソリンが乏しくなっていた事、まさか要質とは思はれない調査の要あり招ちかえった（ガロン）

○◎　赤布片し偵察隊

長さ二尺余巾三分及至三寸の赤布片で陽標用として偵察隊が地上二米につけてくれたものであるが（約五十本使用）登上すれすれであったり埋っていたりして発見しにくく、残置の位置がわかちないため方向判定に苦心した事も一重や二重ではない。又半の根の根なだゝ広い森林帯ではガスや降雪の場合には視界内に番号を所して位置の認められる根な距離と方法をえらばべきであ[illegible]。ラッセルした雪の中から出る場合もあり、五十数本のうち前半数しか発見出来なかった。

○◎　器具

は当り前の為置と思って体力に余裕を持たねばならない。この点Cしが隊員の体力不足による継続中止(実面的結果)となった事はトレーニング不足と共に実に実に残念な事であった。

C3に於けるP3のテント火事はランタンの過熱である。そして頭の過熱である。就床中のローソクはあの脱出事がなかった筈である。

氏張り峠の下りは命令もないのに腹が立つ様な徒歩足であった。東山でも稜裂に至はれた事ではないか。

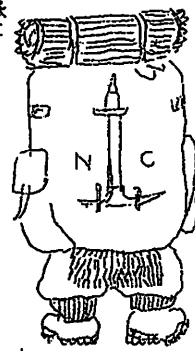
最后に四ケ月の計画にもかゝわらず出発直前アイマイな返事で行けない、行が無い」と言ひ出す態度は今後に強反省を期すものである。

全体についてC地点B小休止の際の緩慢なる出発態度(殊に出発用意が云はれてからのザックの整理など)等東山の反省会に於いて上げられた問題である。

数隊氷川隊の絶大なる協力を謝し又無事で帰宅し自己の責任を如何なく発揮してくれた継続隊員の勇志と友愛に対して深くく感謝する次第である。

西高山岳部の発展を期して。

(一九五二年四月十五日　田中実)



私も各リーダーの様に結果を主眼として考察を進めて行こうと思うが、決して原からの因の立場の場合にのみにこだわらない事き一応ことわっておく。

この山行は「成功」である。勿論私はこの山行は自分の思う所の点を生じなテント内の暖房＝ローソクで充分である。一部アルコールバーナーと炭を使ったが臭気やCOの問題の状態改ひは費用、重量の点から去ってアルコールや炭はローソクに劣る。外気マイナス八度の内はローソクで五度前后、炭で零下十二度、十八度以上ではハキケを起す事もあり(人によるが)八度前后が最も良かった。毛布だけでもマイナス三三度までは充分耐られる。

[illegible]ウス＝整備去の欠陥から第二日までしか使用しなかった。燃料はガソリン(四エチレン入＝有毒)を使用したが別に怒へいは感じなかった。

石油カンカマド＝五がロン入の石油カン(蓋ナヤのもの)を力マドに改造して使用したが、炭の場合でもまきでも非常に便利であった。

出発＝駅で人にじろじろ見られ乞食部隊の引起と問題とされるが、我々ひんぼう者帰宅にとっては、かけがえのないマット石貴々タミなのである。防寒と暖にはもってこいだが、停滞に対しては安定性が全く欠けてしまう事と重量とかさが意外にあることである。その上プッシュがこの際問に安さって見うごき対らぬことおびたゞしい。東人の西月号ではベニヤ板のマット化用法(塩化ビニール防湿)が出こいる部の番長係一見の価あろう。

ベック＝木の枝を切って雪中に水平にうめるのであるが京京での実験はうまく行かなかったが、山上では網と共に木化して安定性は充分であった。尚昨年二月の実験の際瓦雪千五六米～廿米と一尺余の降雪でポールが原中から裂けてしまった。こう云う時中に居た者はシュラフに入っていようものなら身うごき一つ出来ない。まして所なとある場合は。この様な際の張綱とベックの改善の研究と共に竹製ストックの改造によるツイベーク用ポールの研究も始めらるべきであろう。文天恭自身としては出入口がスムースに改良されたいものである。

アイゼン＝普通四本のものを使用したが、これで充分間に合う。又八本のも

かった。[illegible]。明らかに失敗である。当然とるべき[illegible]の方法で[illegible]ない。明らかにCLの「失敗」である。「失敗」が決行以前に当然予想される[illegible]で、「失敗」に終ったと云う事は明らかに[illegible]の事実であり、[illegible]のギャップの甚しいパーティが一名の[illegible]傷者あったにもかかわらず、[illegible]山行とその方式に於いて或る意味で「成功」とみるべきと思う。「不成功」が目の前に見えていて、しかもメンバーシップの不[illegible]したパーティを、しかも冬山としての対象でないものをCLとして[illegible]人間は、どっぱどう「お人好し」でしかない。

四月の[illegible]ではない。たゞ[illegible]に大かれ少かれ雪山の準備をもともにしかも[illegible]どんな人にでも「誤差」の[illegible]

不山行[illegible]の直接原因（[illegible]）は実にパーティ[illegible]シップの不[illegible]以外に無い。田中が言っている様に山行中に[illegible]メンバーシップ[illegible]ものは、当日の大事を気付いてか三[illegible]山以前[illegible]いた。が、山行と云うものは、殊に[illegible]として公式山行は、計画されたと同時にもう既に行動の域に入っている筈と全隊員を全部[illegible]していなければならぬ。メンバーシップは既に[illegible]から要求されている筈である。

[illegible]と[illegible]とは根本的に違う。強力なパーティシップ[illegible]に立つヒューマニティを要求するスポーツ[illegible]

此方に[illegible]の中で「[illegible]くしい」とか「固くるしい」と云う問題が念頭をよぎるに過ぎる。一見くだらない事がくどくどくとり返されるであろうが。

のでも着脱さえ練習して慣はしくさえなければ[illegible]や木上は四本のものより[illegible]ッケが長く利きバランスの点から云っても有効であると思う。

○● 食　糧

餅が最適で行動上から云えば、これ以上のものはまずない。（昼食をのぞく）

欲を云えば十二月頃餅米を大量に買いこみ三月試験后につく様にしたい。米[illegible]でもラジウスでも一番手がかゝり行動的でない。予備食にすら適さなかったのである。乾麺は予定通り無らなかったが、色々の点から餅の次にあげらるべきもので米の四分一の重量です。今年から夏山のあたりから部で一かつして作業[illegible]して備へておくべきであると思う。これは昨年度能で作ったものであるがウドンの使用である。予備或ひは作業食として脂肪分さえ考れば最適と思はれる。今年北大の大雪山遭難ひは十三貫も使用しているのであるからして今年は[illegible]なかったが一考の余地がある。又昼食としてはコッペ一ケとしたがバター1/2ポンド、ジャム廿匁等）これは明大等と比較して新人等は二ケとても食せぬと云う事から決たのであるが或る食欲まれなものには、腹のどこえ入ったか解らなかった程である。カンパンは一人六〇匁（一食）として計算したが、それでもあまるものが居た。今年からはビスケットを焼かせる様にするか或ひはコッペパンに転じた方が食欲の点から見て良策ではあるまいか。一部の隊員からは、もう少し塩分の強い食物のこん立てが欲しいと云う声がある。甘さ節員人部と共にカロリー計算の上にも大きな視野が南けてしかるべきであろう。

（將　利　記）

そして君達は必ず口を立ろえこう言う。　何れわれは楽しまんがために山へ行く」と。だからこそ〜〜と基礎を放ちられるのだ。自己の力の正視と岳友に対する信と感謝の気持がなくて、どこに真の楽しい山行があり得るか。

一個の人間の「快楽」が山に於いて求められるとき、それ即ち「快楽」は同時に多くの他人（或は他動植物）の犠牲を意味する。それ等のものに対して、我々は、まず感謝の念をさげねばならない。又同時に己も共同体（実際的パーティ行動に於いては）に対して全力をそそぐべきであり、これは他から見た犠牲である。又同時に、自身では自己の犠牲を犠牲とは思はぬところの人間にならねばならぬと思う。此所力丈限では単に自己の利害にのみ気をとられている人間は生存し得ないはずである。まず無我からの出発である。メンバーシップも限界的に此所に起因し、又この無我も真に限本的には自己の力の正視正覚の上に立つものと云ってよい。

話は今度の総会にも移るが、準備殊に長期間の研究会を要すると主張した連中も今回ははっきりとその誤りをみせつけられたはずである。しかるに反省会たるや「人員が足りない」か出来ていない。数次にわたる準備会研究会も満足に出来ぬ――平均二〜三人出席――称なんのが自己のみならず、自然丘、楽しみの本源である山行を正しく視、覚り所間的部の活動を正しく評価し得ることは出来ない。その自己の正視なくして訓練やトレーニングを無必要なく山行し得ると云う者が非常に多い。……こう云う種類の部員が幹人として、どのくらいの位置（或は程度）にあるかは平次の文によく出ているが、こうなるのは一般的には愚昧と云うのである。愚昧は、ある事件、事態に対する正覚の無欠除せるドグマチズムに

展望車

○◎わずか十三貫しかないCLの下女人重五百貫長った事があるとあっては、「可能貫荷貫体重ヵ多也」と云はれては隔世一同合理するわけにもゆかず、ハカリにかけては絶々と計算するうちに、一人だけどうしても、ハカリにのりたがらないのがいた。新OBのT。知る人も知る一九貫。

◎◎原論研究にて、……四十代のスキーヤー（婦人）「どちらえ」N「奥様です」すでにウソはばれまった。N「あなた方は」「方座です」N「あそこはいっですね」……ウソは白熱化した。婦人「塩川で下りてどのコースを」N「胸をはってせきばらい一番「大菩薩から北上します」!!……

◎◎同じく婦人「今はその九り指導部が流行っています」N「えー」車中の人一せいに注目す。「これは鍋ブタですよ!!」婦人のてれ方一とおりでない。

◎◎満天の星を仰いでの夕食中、タッチフットの永遠化後、死んでも死なない根力、通称アゴマン君、北斗七星の一角をニランで「家のかはオレが今こんな所で飯を食っ嘔ている奴と誰にも思ってないだろう」とボロリ。一同彼にも望郷の心ありやとニヤリとしたと云うウソのやうな嘘微笑ましい本当の話。

◎◎CLへの途中ラッセラーのN、何のひょうしに藪漕。雪を喰っているのかと思えば、こは如何に、大黄の桶が頭をもって温泉上に埋没せしめ、顔面は雪中深くあり、将にとんだソウナン次第であった。　雪中でき死？

◎◎大菩薩峠で雪合戦と云う事になり、食当のK、ヒックの口をあけたとたん大型のコッフェルがとびだした。おさえんとする間もあらばこそ、コッフェル氏彼のキャタピラーの音も軽やかに日川側へころび始めた。Nが下が追うがアイゼンのため思う様に走れず、長大な急斜面の追撃戦となる。平行になった下きさにダイビンをせんとする所、コッフェルはタックルの下をくぐって大きくバ

よること大であること云うまでもない。無智(知)を我々はどうするには当らぬ。ただ無知を嫌悪すれば良いのである。我々自身が無知であるからだ。要は知見への努力である。行為への科学性の要求である。即ち凡ゆる條件を正しく判断する事によって自己のとるべき姿を見出す絶えざる努力に他ならない。

今度の山行后もこの重大な我々高級スポーツマンの主体性を、すぐ忘れてしまっているのではないか。まだ理解されていないのであったならば、緊急に研究会が必要である。これも忘れてしまっているはずだ。反省会は終るとすぐ忘れてしまう。五月の公式山行にも必ず失敗する。

計画が立てられたときからすでにおって来たメンバーシップさ、再び「失敗」の部としてとりあげ、ひいては自己のパワーの錯誤にまで入ってしまったが、くどくもう一度云うならば、力の正視は、自己に対する不断々々な心の純心さがなければならない。純心さとは、不理性の但我と感覚によって必要以上に誇大されたアタマと、自然に対するはっきりとした観察を失った不安定な耳と、経験を経験と称し得ないフラフラの足とからなる超火星人的存在でないことである。火星人になってしまうと一度転倒すると座に他人が転倒している物に見える。立とうと思っても足のくせは、まことになほ!!切ない。自分の経験からそうしていることだからたしかだ。どれでも若干が、僕の部するメンバーシップがわずらわしければ、又単に存在できずあんとするならば、僕は部活動を辞めて次を提案する。「山岳部員の看板を体育会に返上して、直ちに旅行会に専ぶべし。」

文化祭を開せられた山岳部だ。残った現実性がたんでぼどうするのか。他力本願ではならない。微化学あっての彼岸。純心さに帰んだ自力、ウンドして熊笹の森林帯深く没しさっていった。

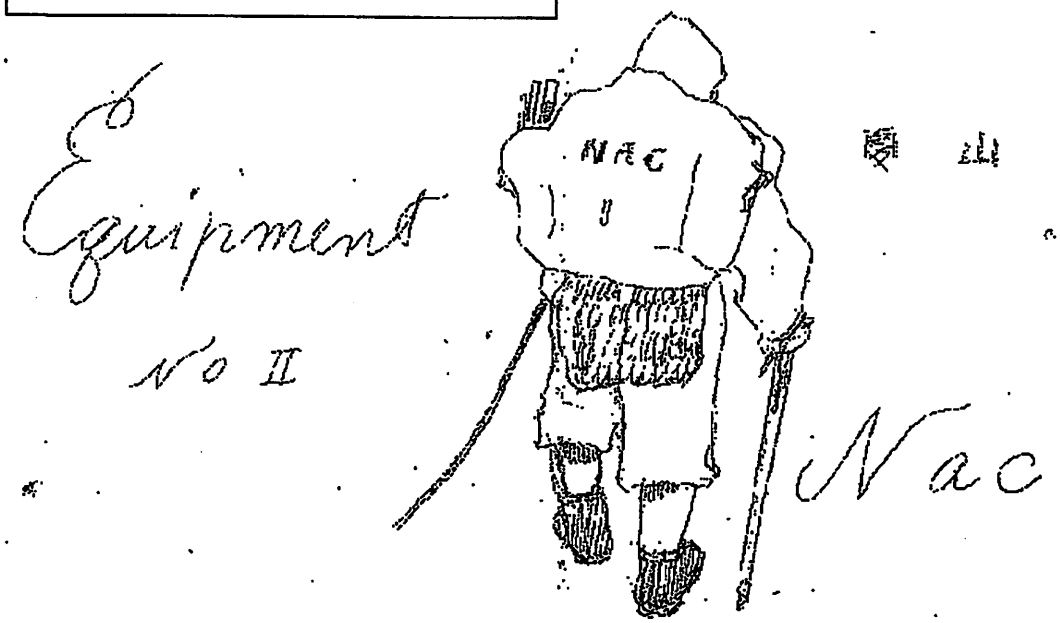
○深雪に隠れた牛一根の小水路も日数と共に部者の姿も無こだかならず。全員鶴れんばかりに結合して一歩一歩ラッセルしながら進む。トップラッセラーのSが突然立ちどまって「熊だ」と云う。前の者はあたまを打つけてとまる。前の方から指差しながら云う。「熊上に立っている」と云う。CLは眼がわるいから暗をすかして見ても分からない。はては「ナタを出す」と云ひ出す者もある。しかし遂にCLが「眼直に進め」と云号が全員一歩一歩小室川側にまき出し、知らず〜巻いて行く。面白い事に、右廻するに従ひクマと熊がだん〜と長くなり遂に一丈近くまでになってしまった。結局笑われぬ悲劇であった。

○CLのテント火事かまのこと、食行のN、Tは驚く見つけて「カジダー」とどなってテントをたゝきはじめた。同時に又CLが「全員起きろ」とどなるがもえている当の住人がさっぱり起きて来ない。如何にと気がかえば出口にあらざる後の入口をめくって出ようと試みている。ところがやっぱりしっかり打ってあるため頭は出ても肩が出ず、もがき苦しむシュウタイを演じてしまった。これも又とんだソウナン、ボ遂。焼死？

○氷川についた一行、「失敗ソバ」でもと、駅に入っている電車を見のがして遂々とソバ屋へ向ったが、「本日休業」。では電車にと駅へ走って、あと一歩、おあずかりし〜〜。電車は一回をしりめに出て行った。失敗の連続をいらだたせるに余りある失敗であった。

本願はなければならぬ。現役部員の底力に大我に立って、まず家族部員と考察するのと要求して、今山行の部のくりとしたい。（拍）

1952.05.30, Equipment No.2, 西高夏山



杉並区大宮前三ノ一一八　東京都立 西高等学校山岳部内OB山岳会NAC
昭和二十七年五月三十日作成　　[illegible]

はっきりるさく云はれることだが、高校山岳部程かそ々年に於いて一人前のクライマーを育てあげる事が不可能に近いということは明らかである。況し登山は単にも高校生活に限られたものではないだから、まず、じっくりと落ちついた心掌がある。第に基礎をしっかりと身につけることである。OBは、基礎を教うしたと考へることなく、常にOB現役の区別のないしっくりしたタテの繋りのある山行を持つことによってこそ基礎の確立がある。夏は自然が最もストコロを示に適当だ。これこそ我々の第一段階のチャンスである。隣の蓼科高原山の回答をあげると、一に山を識ること、二に体力をつけること、三に登攀技術の修得　四に集団生活のチームワークとなっている。我西高では、まず第一に団体生活の準備、即ちメンバーシップ。これは夏山に限らず根本的なものである。これなくして何日何も成し得る筈がない。第二に山を識ること。候変による山岳の諸識夏山生活の制約。そのためには蓼科山だが良いが、それに自己の生活をかつぎ得、且つ充分にリラックスの楽しみを味わいがいる。即ち第三に体力。新人としてはまずこれだけである。今云った通り、夏山の究極の目的は、各種に於いて団体生活及その行動に対する調整と理解につきる。西高山岳部はシステムの特殊さに於いて、特にこの点を重要視する。又、夏山が全てが山でないこと即ち夏山で味った山は単に山の持つ楽しく一部にすぎないことを銘記してもらいたい。我々は「山へ行った事がある」というものではない「好く」人間だ。山の怒りを知ると同時に常に制定する精神が欲しい。「行ったことがある」では情趣はとまっていることだ。常に「好く」という意志の中に「目的を一つにした仲人のみの味わい得る幸福」に浸っていたいものである。もうアイスキャンデーの欲しい頃だ。一本二本かじらずとも山へ行けば涼しい林が[illegible]ある、雰囲気があるじゃないか。

1953.04 発行，彷徨 No.10

第一期（四～八月）公式山行総評

O.B 田中将利

昭和廿一年敗戦の禍こんとんとしている中に早くも体育部として立上って以来六ヶ年幾多の社会的困難と斗ひ、部の前進の先頭に常に立って来た最后の旧十中部員が大学卒業し、いよいよ本格的に新制中卒者のみの部となり、部自体の目的並びに制度の大転換に迫られ、此所に部の充実への一歩として新体勢西高山岳部の歩みが踏み出されたのである。

部の方針を今此所でのべるだけのスペースがないが当面の問題として必要なことは、今年度（一九五二年度）より一つ一つの山行をより効果あらしめ以って山行を通じて基本技術の完全な充実にあてることにしたと云うことである。これにより部分によっては、地味ではあるが、前年度より更にシゴキがかけられたことは云うまでもなくそのためにオニ歩的な岩登り技術等は、殆んどと云ってよい程事実を基本技術へ転嫁せしめた。地味なだけにつらくなったことは勿論であり、部員にして、この期間部を斗ひとることが出来ない者があったとするならば、寧ろその人自身山を止めた方が幸ひではなかろうか。しかし無理があるとでも云うならば「正部員の体を捨てて下さい」と云ひたいのである。私自身の体でも良い。この決定要素は大学山岳部ならいざ知らず、部体の大小と云うことよりも寧ろ自然への強い愛着によっていると云うことであり今更私が説明するまでもないことである。今私の云はんとしていることは、東西もわからぬ中卒者の新人を如何にしてシゴクまえに山をすきにさせるかと云うことである。換言すれば、如何にうまく新人歓迎会を成功させるかと云うことなのである。これは一つの山行を新人歓迎会と云う目的のために目的として行はねばならない。本年度の唯一にして最大の失策は此所にある。全部員冷静に考へてもらいたい。来なかった欠席は一体何か。第四七回、第四八回との連絡はどうなっており他の部員が協力的であったかどうか。たしかに意味に於いて優秀部員の育成に或る程度の成功を見たが、一年部員は完全なる全滅ではなかったが、人は常に集り散じても西高山岳部を殺してはならにもなるまい。次年度にひかえリーダー会の多者撰一の結力させあてておきたい。

次に新仁沢のことであるが前述の方針を充分生かした点で非常に良い成果をあげたが、殆んど一部の班に限られ、或る班は全くと云って良い程の不進歩さであった。これも又パーティ、山行の研究と共に我々指導陣によい資料を呈示してくれた。コーチ―撰出の方法を再検討する要があろう。報告にOB間で山行の意見の相異があった様に記されてあるが、パーティ自体を良く考へて見れば、自ら行うべき道は一つしかないのであり、又小生のOB不統一の責任でもあり反省している次第である。尚一年生の不参加

に関しては、リーダー会の積極さを攻めねばならないであろう。

奥山の二つの合宿に出て見て、ふと感じたのであるが、箇所別合宿の方は、部員各自の自発的態度にまかせ、後者の北アル合宿では事前に数回の準備会を開き、合宿の意義並びにメンバーシップ、生活技術、その他細目にわたる講義を行ひ、部員になりきらせ、合宿時には、OB側が積極的に行動を遂行させてみて、結果は想像とは逆に、短期間(三ヶ年で)の基礎充実には理想的な後者に於いて良い成果をあげ得た。勿論、いろいろの不平と云うものも出た様であるが、云うものに決して準備会に満足な出席がないと云うことを知って貰きたい。又一年生には体力的にコクであったので、次年度より一年生[illegible]準備会で与へられたものをもととして自発的に行動することこそ最良の方法なのである。そう云う意味を新人中田口は銘ざるべきであろう。又一方前者の場合は、自発的に動き、犠牲的精神と献身するのは、殆ど決って正部員か或はそれを新来されたものだけであった。このことは同じ準部員同でも一回の山行で、とてつもない実力の差異を生ぜしめてしまったのである。それで良いとは云はれるかも知れないが、我々OB側としては、伸長に幾分の差こそあれ、全部員の歩調を揃へて行くのを限りなく欲しているのであって、唯一人でも遅歩の痛感しているものがあっても不愉快なのである。早く一人前の登山者、クライマーである前に登山者でなくてはならぬ)になって我々の仲間に入ってもらはたいからなのである。

奥山自治寮の一つ一つを検討してみれば、第一に奥山自体をよりエンジョイすることは、前者に於いて目的の七割、後者に於いて五割前と云って良かろう。後者は私がシゴキ過ぎたと云うこともあろうが、前者の如く両でも一つの山の断面なのであるから楽しめるだけの地のゆとりを早く持ってもらいたいこと。である。団体生活の理解と融化並びに合宿による明日の期待は、先述の如く個人によりより大きな差をひらいたのみで終った様な気がしてならない。結局、団体生活の不理解者は落伍せざるを得ないのである。第二の山容の認識、生活技術にしても同じことが云えると思う。奥山は、その年度の新しい共同の力を作り出す根元であり、新人歓迎会に次いで力を入れるべき山行であり、それと同様に二つの同様な合宿を作り共同の力の作成が半減されたと云うことは、私論と云はれもしようが、大きな失敗であったと云ひたいのである。もう一つシゴクことであるが、クリセ!ドを例にとって見ても、アクシデントと云う欠陥はあったが、缶詰を午前の組の者との間に、はっきりとした実力の相異が生じたことによってもわかる様に、[illegible]に対する限界を知り得たと云うことは、決して忘れてはならないのである。たゞ、そこにシゴクの限度があり、我々としても、それをはっきりと云ひあてることは不可能である。要は部員各自の自主的活動にあるのである。

然も前、未し方をふり返っては、自分が本当に自然に対して愛着を感じているかどうかをたしかめ、常に新人としての気持をわすれず、厳粛な責務で自己のフロンティアラインを押し進め、克ち取ってもらいたい。奥山の二つの合宿を見て、激しく、そう願はずには居られない。やがて輝く冰雪の山でんにNACの旗幟をうちふる後輩に八イルを叫ぶ日も近かろうと思うのである。

〔完〕

1955.04.20, 西朋 No.6, 巻頭言

（1）

第三年度の目指すもの

たなかまさとし

◎我々の会が都立西高を誇りとするが故の結果であることは勿論である。

西高山岳部OB会が設立されたのは昭和廿五年の九月と記憶する。それが翌二十六年十月に早くも解体、志願制度の入会としNACとして発足した訳である。しかるに主目的が西高山岳部の親睦のみにあったためか、当時の常として山に求めるもののまちまちな集合体であり、実行力のない張デッカチのOB会であったのに対し、いさゝか不満を持った我々は、殿の浮ついたハイキング派とは手を切り、互の長所を生かすべくNACの一員としての西朋登高会の結束を真剣に考え、二十八年四月一日その設立を実現したのだった。我々の目指すものは享楽としての山でなく意欲的な登攀の実践並びに西高山岳部の正統的指導にある。我々の会の生命は若さと情熱にある。NAC主流の奢むさゝの排除にある。

だが待て、第二年の山行を顧みて、若さがあったであろうか。情熱は燃えたろうか。少くとも入会に先立って会の主意を伝えた筈である、忘れたとは云わせない。会員が集ってから会の目的を決するのではない。我会に於いては発会に先立って厳然は決している筈である。そして志を同じうする者のみが、西朋の旗のもと駆参じたのではないのか。入会を誤ったと思う者は去れ。NAC主流がある。例え残る者が五人、十人でも良い、永遠の兄弟、姉妹として血を分ち合い、紅蓮の情熱で涙を絞もう。第三年度に目指すもの……それは新たなるものにあらず、赤誠、忠誠と云う前進である。

◎我々の兄弟、それは社会人あり大学生あり浪人あり、各々その社会環境を異にしている。西高生当時の如く一律の山行を行わんとすることは明らかに許されぬ問題である。技術的に見ても各人各様である。会の運営は実にむつかしい。第一に今年度前半期に於いて　会の空気の確立、第二に同じく基本的の確立を目標とするつもりである。

意欲的な登攀を何も高高だとか谷川のみに考えを巡らす必要はない。各人の至当的、時間的に許される範囲内で、自己のフロンティアラインを意欲的に一歩一歩押進める事である。対象は人によって異る事は当然であろう。高尾山であろうと御岳山であろうとスポーツアルピニズムの実践には対象となり得ることは勿論である。年に毎回山に入る者も居るだろうが、率直が許さず一・二回の者もあろう。そんな事はどうでも良い。要は一人一人の若さにある。山に行けなくとも、月一回の集会で楽しく友の手柄話でも聞こうではないか。

ともかく急くさいのだけは、ごめんなのだ。

（一九五五・四・二〇）

1955.04.02, 西期 No.6, PP12-14

赤岳西壁中央リンネ登攀

P　田中行利　相田嘉三郎

期日　四月二日　晴天ガス　AM六時零度

装備　ザイル三〇米・一、アイスバイル　1、ハンマー　1、アイスハーケン　1、マウエルハーケン　16、カラビナ　7、食糧　三食分（他ビッケル、アイゼン、ヴィントヤッケ、ウインドホーゼン、オーバーシューズ、毛皮手袋等着）

BC（八三〇）―アーアンザイレン（九四〇―九四五）―赤岳（一二二五―一二四〇）―ABC（一二三〇）

雪深いタンネの森を一昨日から踏みおいて固めたラッセルが軟かに折れはじめ、主稜がそして赤岳、横岳の連なる男性的なフェースが薄明の乳白色の中に初雪と浮び出した、行程四米、中岳沢三股より赤岳沢との中間稜に取付く。遠望の通り稜まで落ちるラッセルは立ちはだかる思いだ。森林限界まで十五分の急ピッチ。コブに登し一二時とエネルギー交換が始まる。仰ぎ見る赤岳の西壁は非常に稀薄に一線を画してなだれ落ちている。コブ上部のリッジは昨日のステップを切りなおして登り最初の氷溝の下に達しアンザイレンする。まず四ピッチはレーソーでアイスフォールを右に捲き最初に約五〇度の堅雪面をキックして登り氷溝上部のヴエルグラ面をトラバースし、三〇米マキシマム四ピッチ一二〇米で二本目のリッジ頭ちゴー直上に達した。

強烈なレッデなく不安定なナイフに明瞭リになって連続するラストを横に、田中トップでスタカットに移る。ヴエルグラされたサイドリッジを更に横断にニピッチ直上、ホハングに直面、氷だ口光り物ヒを使用する氷にもならずに側ルンゼ内のアイスバーンにビッケルを振りながら踏き込みリッジにもどるも再びハングに遭遇。リッジ上は垂直約五十米の岩塔が霜氷に身をまとい立はゞかり直の中央リンネは深いクーロアール状に約2の氷溝を垂下している。トップ上部より確保の上、ラスト潮明、直剣ルンゼに向って音響をトラバース・トップ直下二〇米にてバケツを振り捨て。更にラストを攻撃としてトップ明中アイスフォールを目が行て待期時、三〇米いっぱいにて岩壁基部に達し最初のハーケンをたたき込む。第ピッチ目クーロアール中央に突入、薄氷をカッティングしつゝ一歩一歩確実に進る。上部の氷面は薄氷をあびてギラギラと輝いている。頂上も霜氷の盛に身をかためたための岩塔にはゞまれて見えず、たゞ見くまでも深い蒼空と一所のステップ。思い出した様にのびるザイル。時折金属音を生じて飛散する氷粒の流下に鬼の子の様に首をすくめながら……ステップバイ・ステップ、冷厳なる氷雪と対峙せる精魂の斗争あるのみ。二十米にてクーロアール最後部に達しハーケンが美しいハーモニーを岩壁にかなでる。やゝ傾斜の落ちた第ピッチ目は逆光をあびて、ビッケルの一撃〈の下から七色の氷粒が、紺碧の天空に消えて行った。更にし

(14)

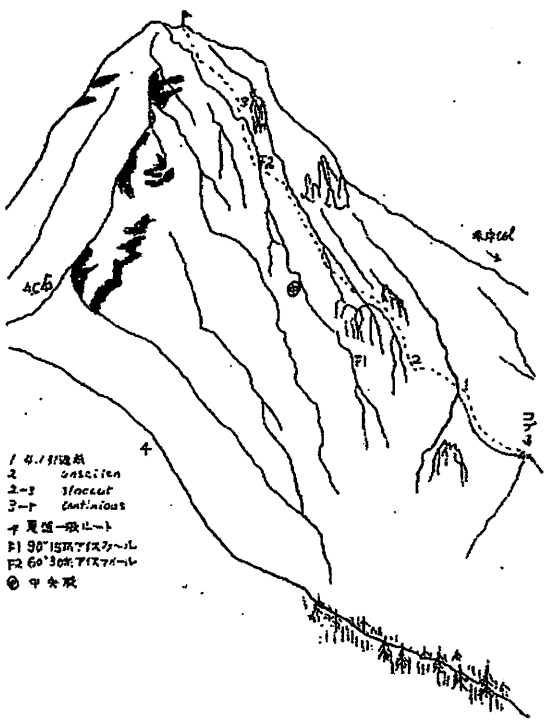
ピッチでアーロアールに別れを告げ五下から這い上って来る市丸いトラバースバンドにとび出した。紅光節理の北峰の崩乳も、白銀の南峰の雪風も手がとどきそうだ。口笛が流れる月日ピッチ目のスノーリッジをシャフトでたたき崩し、まばゆいばかりに反射する雪面を約百米コンティニュアスのまっ新峰三角帽に登り詰めるセカンドの大任を果した福田と死ず爆雪の進平、そして二タッ、北峰で根まわしのやきザイルをときこッ道具をしまい横歩の山頂に残れた野郎共に完歩の喜びを伝えようとピッケルを幾度も打振りながらアドヴァンスこへと駆け下って行った。

〔註〕技術的に問題を感ずる様な箇所はなかったが二・三日来のデリケートな雪質に対しては最大の注意を払った。別にクレバスの箇所はブロックの落下を恐うと危惧がないだけに慎重な歩行には慎重を期した。岩は概して赤茶く脆弱であったが上部岩氷によってコングリートされていて幸であった。総合体としての平均傾斜は五十度強位で、まとまりはなく中央稜にしても聞く程手強くは見受けられない。あまり短時間なので我ながら驚いた次第。ハーケンは全てセルフビレイに用い五本を使用したのみであった。（一九五五・四・一二田中記）

(13)

八ッ岳赤岳西壁ルート図

1955.4.2 Party 田中月利 佐藤玄二郎



1955.07.01, 西朋 No.7, 編集後記

編集後記

●真昼の銀座の歩道に、華やかな夜の新宿に……凡ゆる事物に既に真夏の色が出て来た。残雪の山の報告がやっと出ると云うのに。歳月の流れの早さに今更ながら驚いても始まらぬにしても、季節の山に遠ざかっているうちにロマンの華も咲かずに頭が禿げ上るのではないかと心配にもなる。

●5・6・7とアルピニズムの再強調はやりであるが我々もこれを真剣に考える要がある。何事も言行一致。だが何も山へ登る毎に修業だ何だと云っていたら、それこそ本末顚倒と云うべきである。アルピニズムの底を流れるのはあくまでもフロンティアスピリットである。未知に対する人間のデバガメズム以外の何ものでもない。ブラン・ジラス北壁に輝くかストン・レビュファはその一座と雨、の中でこう云っている。「あこがれから人生の大いなる喜びが生れる。そして歴れは常に持たねばならぬ。私は思出よりもそれが好きだ」と。未知の世界に対する憧憬と意志それのみが近代アルピニズムの背骨と云ってもよかろう。夢……誰だ笑うのは……ゆめほど大切なものはない。一人一人が疾らず夢を持ち互に語り会える様な仲間になりたい。その様な意味を持つ会報にしたいと思う。

●最近特に感じた事だが、山行と云うものが山でのみ行われると思ったら大まちがいである。山行は家庭に云って計画してより後しまつをつけるまでを云う。山行へ行けば行きっぱなしで、借りた装備はそのまま一ヶ月も半年も放置、個々と云わず団体と云わず、……そして報告も出さない。確かに学生は社会では大き目で見られる。だからと云ってそれを甘受する様であったら馬鹿も大馬鹿だ。てめえのケツもぬぐえないで大学生でござい面が聞いて笑れらあね。胸に手を当てて、とっくりと考えて見る事だ。

●この号が貴殿、貴女の前にとどく頃は既に瀧葉子は夏山の光陣として紅の雲上人だ。では八月の集会まで。（將）

○西朋才8号は原稿〆切九月一日、発行九月十五日、夏山報告特大号約五十頁の予定。

西朋報告　才7号

発行日　昭和廿年七月一日

発行者　都立西高OB

西朋登高会

東京都大森町一八〇　田中方

1955.09.15 発行, 西朋 No.8, 研究（総説）

資料より見たる積雪期魚沼山塊

田中將利

尾瀬沼を東端とし平岳（二一四〇）約倉（一九九八）丹後（一八〇九）巻機（一九六二）朝日（一八一九）谷川（一九六三）仙倉（二〇二六）の稜線を連ね日光山（二一四〇）を以って西端とする延々一五〇粁に及ぶ山塊を我々は上越国境と呼んでいる。これに対する冬期記録は燧岳（二三四六）を中心とする尾瀬周辺を除くとわずかに谷川岳周辺が岳人の対象となって居るに過ぎない。此所で僕が問題にしたいのは、この主稜より搭越国境（只見川）辺りに位置する越後魚沼の山群である。常識的に早くから開けて居りながら何故冬期の対象とならないのか。主要山岳をあげて見ると、中の岳（飯山二〇八五）、駒ヶ岳（二〇〇三）荒沢岳（一九六三）鬼岳（一九二五）八海山（一七七五）の五座がある。商度は実多摩長沢背稜程度であるが、標高一五〇～二五〇の魚沼平野から孤立する高度は実に一五〇〇～一八〇〇米に及び実に上高地よりの槍、穂高、上合よりの谷川のそれをしのぐ。剱岳西面白蛇剱のそれに比較すると同時に、十月下旬より見る新雪は十二月一月と寒冷風が強り、いつ止むともしれず降りつづき、二月には小出（一一〇〇）ですら三米の積雪を見る。四月より移転する天候も五月初旬まで降雪があり、雪崩の難と化す。六月初旬、稜線のブロックが落ちつくす迄は積雪期として考えたい。谷を埋める雪は万年雪となって次の年へ持込まれ、又新雪が全てを埋め尽してしまう。地形は谷川東面のそれに似て鬼岳を除く四座とも荒々しく削られている。加えて谷川より積雪が厚く、記録の多くがスキーの使用出来る北ノ又側に限られて居るのを見てもうなずけよう。水無川水域に至っては十一～四月迄の記録なく（夏ですら無数の未登峰峠だ）燧岳三山と云われる所、中、八海の初登走すら積雪期初登攀以来廿五年間の歳月を要しているのを見ても如何に悪いかどうかがえると思う。開拓期は学生山岳部が主力であり しかも人夫を伴い、北ノ又側から登って居るが、これら学校山岳部は、昭和十年を期として、登山早等が中心となって山登りの形式は一変した。日本の山にしても、ラッシュタクティックの時代から雪中幕営の研究、集団としての冬山、即ち、より活動範囲拡張のポーラーメソッドへと転換した、それと同時に学生界から谷川、魚沼が見捨てられた。何故か。新鮮な感性の山こそポーラーの対称であるべきなのが、それまでの記録が全て北又側から開神尾根の唯一のスキールートからのみの登攀であって、水無側の感さ、稜線の感さ（何故ルートとして選べないか）を欠れていない。

記録の多くも紀行であって単なる観上マニヤにすぎず、ヴァリアンテに対する意欲に非常に乏しい。現象考察がわずかに「山岳」第三五年二号（田中実―北又川―）があるのみである。昭和十年より廿年の間、侯の努力が足りず、まだ一つの記録も手にしていない。実際国が谷川に全力を傾注して居る頃のものだ。戦后は水無川のヴァリエーション三本が、昭和廿四年七月、川崎山岳会によって登られ、東京岳連にて昨春の連合積雪期上越国境縦走の一環として取り上げられるに至った。所が岳連で最盛を誇った登歩渓流会豚がまず八海山で攻撃に座折してしまった。この敗北は一般山岳会に大きな反響をもたらし、第二の谷川として浮びよった。これで学校山岳部に変って積雪期敵沼に実践団体代が台頭したのである。

記　録

1　一九二九年二月一六日～三月七日
神戸商大・中川秀次・高橋・人夫二名　降り続く豪雪（大湯四米）の中を技術峠越三月五日中荒沢小屋よりスキーにて一八〇米に至りアイゼンで積雪期ヶ岳初登攀、風雪の為中ノ岳断念。（「やま」六号による）

●（注）これに先立ち原大登商会大崎亮吉氏・一九二八・三・駒岳を計画せしも直前の三月廿五日、前穂北尾根にて故人となられている。（「登商行」七号）

2　一九二九年三月　原大波木井六男・奇藤長寿郎　山田吾一
岸実一の四名、一七日小出発　技術峠明神神社の祠にもぐり込み二二日フラストした明神尾根より駒岳第二登一泊に大湯へ下る。（「登商行」七号）

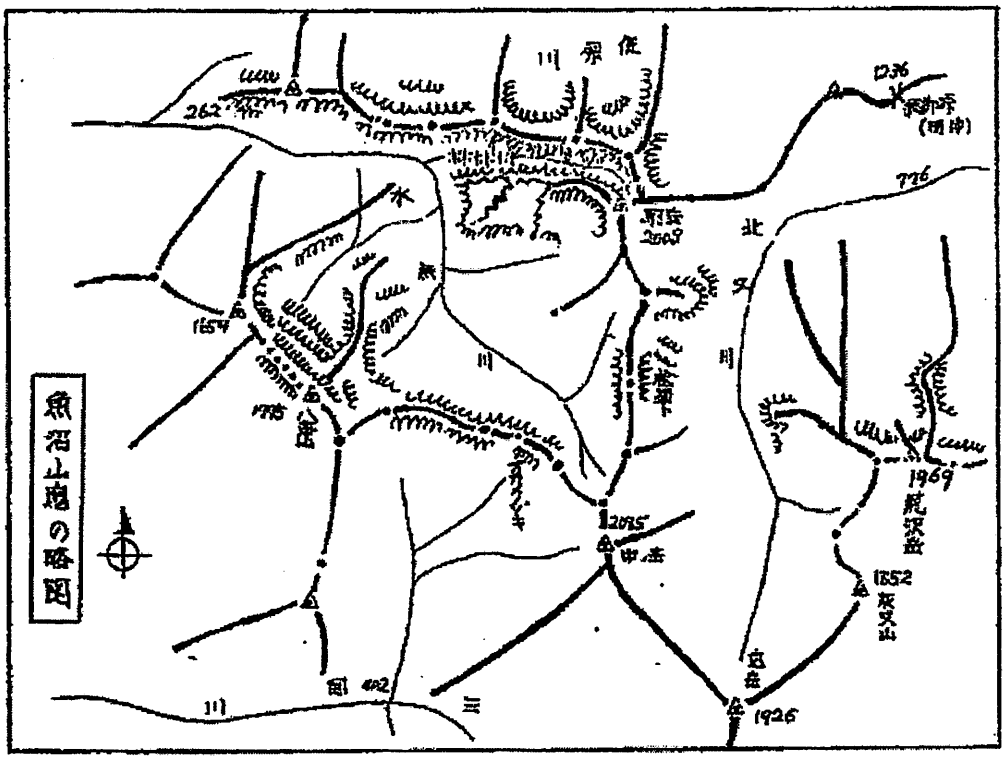
3　一九二九年五月　原大　奇藤長寿郎他・一二日小出発芋川まで自動車入る、一五日グミ沢より荒沢岳東稜一五一四峰尾根をアイゼンにて登り、荒沢岳、荒又山を越えて一七四九峰にてビバーク。雪は三月に比してしまれども足下より強崩れ行くこと数回、一六日、内なるも兎岳、中岳を下り一三三四峰下にて再びヴィヴァック。稜上のブロック所々残り居りオカメノゾキは雪なし、一七日、八海山八ッ峰へブロック大半落ち尽しあり）を越え大崎へ下る。（「登商行」七号）

4　一九三一年一月　原大　大河原晋作　金山淳二・八海山初登攀（年度不明）

5　一九三一年三月、原大　大河原晋作　金山淳二　二八百城内より八海山五電池にテントを出し三〇日中岳に向うも猛烈積雪状態悪くオカメノゾキにてビバーク、三十一日、悪天候を中岳へ登りスキーをつけて荒又山に達しヴィヴァーク北又川を苦労して下り枝折峠を越え三日大湯へ下る。（「登商行」八号）

6　一九三二年三月　山形高・桜井敏夫　高崎健造　入江明・田中実・吉田三郎他人夫二名　十五日小出発　十六日枝折越雪投沢小屋入り、二三日スキーにて明神尾根より駒岳登頂、二四日大湯へ下る。（「山岳」三五年二号）

7　一九三二年三月　一橋大　高見要　鈴木兵雄　増山清太郎
十合岳二の四名十八日大湯入　二三日明神越白沢出合小屋へ入



る、二四日駒岳登頂　二六日北又に沿いてスキーで登り中岳肩に達するもアイゼンなく、又時間なく登れず一六時間で小屋へ帰る。三十一日大湯へ下る。（「針葉樹」六号）

8　一九三二年三月　明大（パーティ不祥）二四日明神の南に入り二七日駒岳登頂。（6・7の文中による）

9　一九三二年五月　中島治一郎他人夫一名　十三日枝折越村杉の民家泊（御山平、村杉の部落は出作りである）荒沢北壁は雪もつけずすばらしい。十四日マエグラの尾根へアイゼンを着け取付き荒沢岳に到り撮写、北壁の雪崩敢し、十五日剣岳、中岳を経て桧原下手前幕営　翌日駒岳より明神を経大湯へ下る。（「山岳」第二七年の二号）

10　一九三三年三月　山形高　田中興　人夫一名　二七日大湯入　二九日枝折越登授小屋に入る。三〇日マエグラの尾根にルートを取り荒沢岳に登頂。一六〇米より上部はアイゼン着用、表層雪崩を三回喰う。三一日中岳偵察。四月一日タモノハナ沢出合スキーデポ、南へ至る尾根より中岳登頂。二日大湯へ下る。（「山岳」第三五年二号）

11　一九五〇年三月登山渓流会　川上晃良　宮野元等他　岳連第一隊として一七日大湯入り。二一日八海山千木桧に五名サポートと共に進出　二四日八峰を越え五竜池。二五日中岳へ向うも猛吹雪に阻く。一三四四附近にてビバーク　二六日断念して城内へ下る。（「山と渓谷」一四二号）

12　一九五〇年三月　川崎山岳会　天野誠吉以下五名岳連鉄走二

隊として三国川より中岳へ登ろうとするも廿一日より暴風雪となり、二二日新道より一日かけて十字路との中間までしか進出出来ず断念　廿三日六日市へ下るも第一隊と連絡とれず。（「山と渓谷」一四三号）

13　一九五三年四月　小出山岳会　皆川完一他　一日大倉より水荒川に入り　モチガ花沢小屋、雪少くブレバス多数　二日水荒川S字を登りシン沢を登り中岳小屋に至る。（厳冬遭難を喰う）三日北又シバ沢を下降北又間歩場へ出る。積雪南水無側の最初のものである。（「山と渓谷」一七九号）

14　一九五三年十一月、山岳遭難救援部（群馬不明）勝川俊雄他（ガムス三号）

15　一九五四年四月　山岳遭難救援部　所村正一　南獨跟　不取夫　後藤勝男　承山正人の五名八日大町を出　十日八海山八峰を越し五竜池十一日オカメノゾキ突破し十二日中岳　十三日剣岳　十五日御昇竜線を一四二〇米峰まで下り、長頭沢から大湯へ下る。これは諏訪無沼三山に於ける積雪期初縦走での山頂界底根上部の唯一の記録である。（「山と渓谷」一九〇号）

以上一五の記録を挙げて見たが、異論には昭和十年～廿五年までの記録もあると思う。これらから云える事は、二・三の例外（敢行の日・月）を除いて全部が、今年は何十年来の大雪だ、と書いているのが如実にこの山塊の気象の厳然性を物語っている。

ようで、十二月～二月の本邦風景画の時はともかくとしても、三月下旬ですら昭和七・八年及び廿五年の如く　五日も一週間も暴風雪が吹きまくることも珍らしくなく、一夜に二米も降る事すらある。日本海からの、重湿温度の高い雪を降らす為か、降る時は夕立の如くであり、スキーをつけて腰までもぐるが、止んで数時間もすると急激にしまって歩き易い。雪質は極度なデリケートさを有している。雪庇ブロック、雪崩の問題が登攀の大きな要素となっている。三月ですら三～四日に一日の行動が可能になるのだから厳冬期は相当苦しい登攀を覚悟する要がある。やはり四月以降が最も天候が落ちつく。気温も三月の北又河岸（七八〇米）で、零下三～七度が普通であるから、スケールは大きくも高度がやはり低い為だと思う。春雪期のこの山塊では、デリケートな気象條件と雪質の中から好機を正確に把握して、最高の技術と力で事を決する要がある。茲にこの山に於いては　雪荒の永雪技術がすべてを決するに重要な鍵の部門と点めている。

まとまりのない文であるが石の様な事を結語としたい。又所を見て補正並びに、ヴァリアンテの発表を発表してみたいと思う。

（五万分の一「蒲原」「八海山」「十日町」参照のこと）

第三図　冬山について
○冬山　対象八海山
（1775米）　期間12月
29日～1月7日
隊長　田中実

今年度冬山は人キー合宿は行わず会の全員行、全力を八海山に投入する方針である。全部制約の出来ないものも交代して参加して行いたい。会の技術がどの程度のものか、我々の団結力どの位のものか良き試験となろう。第四部望者は十月十日迄に参加表明のこと。オーバーズボン、オーバーシュウ、ヒッパー、登攀具等揃えてまとめて注文する予定。

1955.12.31～56.01.08, 西朋 No.10, 冬山合宿八海山（抜粋）。
（将利氏は同時期、穂高におり不参加）

第三年度冬山

35魚沼八海山

高立西南山岳部OBによって企画された合宿は第三年度を迎えた。思えば中学、高校を通じて先輩らしい先輩も持たず、一人のコーチをも得られなかった我々は、専らその山行を制約せざるを得なかった。登行は地道に実践又の赤旗等ではぐくまれ固実ではあったが、それが少人数に限られ、しかも機関会議を大学運動部に置いて居る関係上、一つの時期に会の総力を結集するという事は非常に困難であった。過去二年の厳冬期は、スキーと個々の実績に止まり三月は身近な八甲にヴァリエーションを求めて出掛けて行った。しかし第三年度冬山を控えた我々の眼上には、かってない程の緊張が集中された。何故なら、会員の大半を厚生に属する我々に一つの積期が初めて訪れて来たのであった。精神的、肉体的な或る安定感が備って初めて挑戦がひろがって行くのである。

五月のリーダー会は実力を飛躍させて業を分担した。理想は高かった。しかし、たとえ、それが二流どころであっても三年度の我々には出来過ぎていた。六月のリーダー会において、隊員は八名以上で構地法を採用する事に決定した。勿論極地法は最初の試みであるので、いわゆる試登隊員として同時地にも影響を与えた。北岳池沢尾根と八海山が最後に残された。この二つを決定する事なく、他合北面合宿と八甲に集中形式による別班編成が十日間三班によって行われた。九月、最終決定時期を控えた。八海山が選ばれた。我々の技術向上、ベルを見るならば氷壁技術の実践がはかわって、過去、ラッセルを強いられた魚山が最台に選ばれていたのであるが、その解決策として、豪雪塩八海山が選ばれたのも一理ある事であった。ともかく自頃の精進がどれほど功を奏するかという事は、なかなか興味ある問題として提起されたのであるC・L田中実、な隊長に決定し、毎年行われていたスキー合宿を中止して総力結集に務めた。資料は会報八甲において田中将利氏の〝資料より見たる積雪期頃冬山塊〟によって全会員に浸透する事に務めた。十月上旬、偵察隊が出され、主に八海山南面、山田一利氏の助言及び数回の偵察とされている〝八つの岩峰〟が偵察の主題とされた。山岳巡礼会の歌曲〝越後三山〟は我々に偉大な印象と感動とを与えたものであったが、この地方独特の〝ドカ雪〟は山田氏の助言によってなお恐るべき印象を与えた。厳冬期のラッセルタックは不可能であることが厳然としている。しかしながら極地法は勿論、四々の体力、精神力の試験は明確な事実となって提出された。B・Hを八海山社務所とし、C1を一二〇〇米附近、C2を一六五〇米附近と定め、全日程を十日間とした。この日程（一月一日～十日）は試験期を控えた我々には、ある意味を示さざるを得ないものであることは事実である。十一月の集合より毎週月曜日に準備会が開かれ語り計画の進展を見た。

（田中　実）

▲期間　十三年廿一日より昭和廿一年一月八日

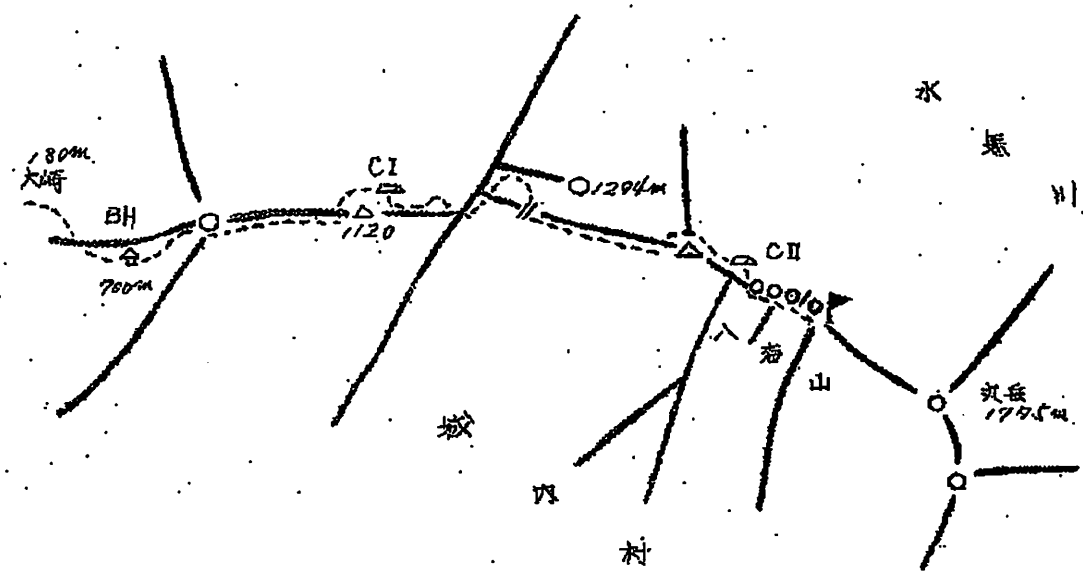
▲編成

第一隊　平沢　勇（記録）　21
　　林　武志（後衛）　20

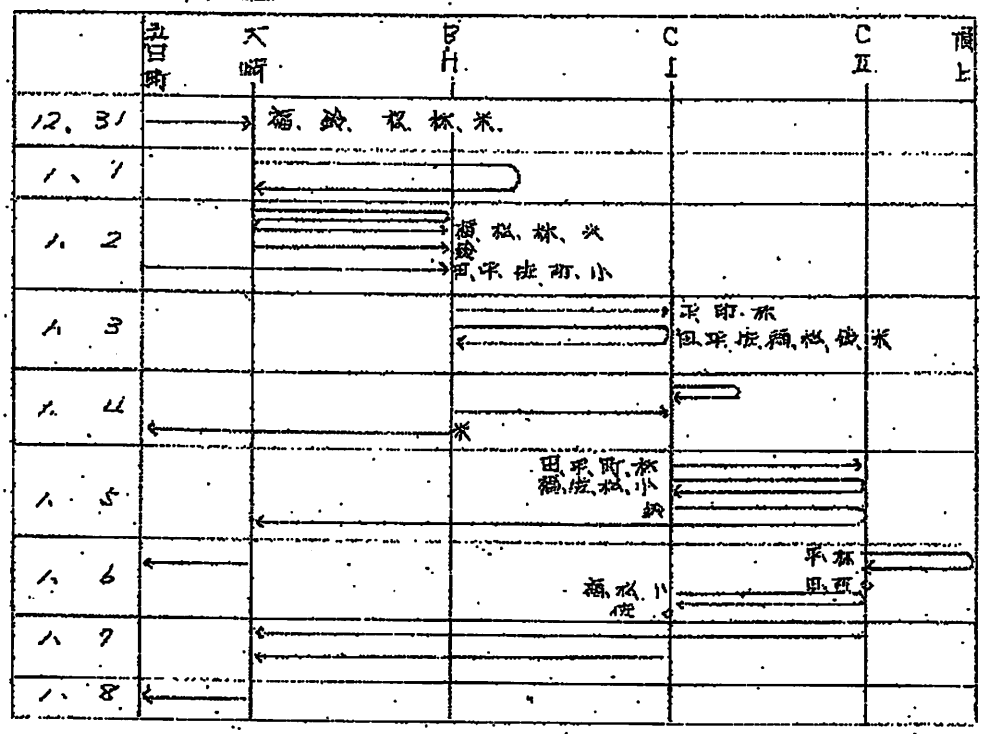
第二隊　田中　実（リーダー）　22
　　町田　晴（斥候）　22

第三隊　福田　宏二郎（斥候）　30
　　佐藤　信治（会計）　22
　　鈴木　輝夫（燃料）　22
　　松田　朝夫　22
　　小田　尚治　20
　　米野　弘能　20

越後八海山略図



行動表



迎えられて社務所に還る。夜は神主山田氏も来れ、成功を祝って乾杯。ビールで盛宴者を数名出したが社務所でならば心置無用。

一月八日　雪

〔解散〕

朝、隊長の解散宣言があり平沢の出張所、残り七名は横にさわったスキーをしに石打で下車。どうやら天候は本格的な冬型になったらしい。しんしんと降り積りゆく雪の中で長山合宿の幕をとじた。

（平沢）

▲機記

厳機、厳冬期初登攀、厳冬期初二登という記録（山田利一氏によると）は我々の手中に落ちた。計画はぴったり起風りに進行し、一日の停滞をもする事なく、全員無事下山出来たのであるから、これに越した喜びはない。その原因はあまりにも明確であった。天候が文句なしに我々に幸いしてくれたのであった。極地法は最初の試みとて、慎重を期して当ったが、それがあたかも極地法の見本の如く模倣されたのであるから全く料の打ちどころがない。ラジオも持たず天候予知が勘を頼りに行動したわけだが、凄いなれた山とか、庭山ならいざ知らず未知の山での勘であるので、厳々恐々と前日を願う気持は誠に切ないものであった。気圧の配置、天気図等、科学的把握なくして成功など、あり得ないのであるか

八海山暴風表

睡眠用具	天幕 2	No.5(ナイロンタイプ 4人用)、No.8(ブロードタイプ 4人用)
	マットレス 13	ヘアロック 12、カポック 1
	スコップ 2	
登攀用具	ザイル 3	30m
	カラビナ 5	
	ハーケン 9	
	ハンマー 2	
	捨縄 1	
炊事用具	小鍋 4	
	ラジュース 4	内訳 PRIMUS、SVEA、STARMAX (附属品を含む)
	温度計 2	

り、山に登る者、誰しも共感を持たねばならない。当初、大崎附近より相当の積雪を覚悟し、郊外雪のラッセルはここより開始されると判断し、なおドカ雪を要求した様なであったが、大崎附近の積雪は一尺ほどであった。ここにおいて兄弟隊、福田は早速を金剛沢泉に上げる事に定めそれを果たしたが、実にあざやかな好

判断だったと云えよう。何故ならば翌日のCI建設ラッセルは、十名で実に六時間余りを費している。又、ドカ雪をみた場合、当初予期した社務所、CI間では二日乃至三日位程ともならざるを得なくなったのではないかと思えた。しかしドカ雪を見れる題題は一般に部落民、と、それを聞き伝えるものに大きく、一種の伝説化された形容となって皆さ安いから、そたらに過れてはならない。(これは二、三に強くみられた事である)

荒天の後を新雪は約二尺にもかかわらず降雪のラッセルを強いられた。この悪映は今後の計画に相当影響を与える事であろう。ラッセル方法の差が非常に大きく現われたが、これは悪映と云うより幸福であって、下手な者は研究を要する。検討会において種々問題は指摘されたが、その前に、準備会における経験不足を知らねばならない。これは今回について云える事ではなく、常にそうなのである。アタック隊を除いては、術的に云えとされる様な術はなかった。極地法そのものを更本の如く徹用したのであるから、テントマナー等々各山にかける様式は模範の如く行われたのではないかと思う。しかしこの余裕は二度と様々のものとはならないであろう。装備、食糧、金計等に問題とするところはなかった。

被服として著く悪な事もない。しかしこれにおごる事なく、次の山を望まねばならない。ただ一年の総計である冬山であるのに、会員間に無関心の者が多い事は遺憾であった。

今回の山行について八海山神主、山田利一氏に並々ならぬ御厚誼をいただいた。紙上を借りて厚く御礼申上げる次第である

――(田　中　記)――

編集後記

○

今冬は十数年振りの大雪と云はれる。十二月初旬は本邦南方に横たわる気圧が発達し大雪はなかったものの、中下旬は寒くまかなりの積雪を見、更に二月及び三月上旬は、ここ三ヶ年来の積雪から見ると、確かに豪雪と云える。気象も狂って暖冬の筈ではなかった。しかし、我々の迎えた五月の八海山、三月の八ッ岳に於いては、幸か不幸か、その積雪に恵まれることがなかった。唯かに所期の計画は遂行し得た。だがそれだけで使いだろうか。

○

如何なる同度から見ても底意地は、勝敗のやしりをまぬかれない。富士山の久りップ事件にしてもしかりである。極短波そのものについても所期の不良は明らかである。型のみを模倣しているとすれば、とんでもない錯誤と云わねばならない。根底を流れる何物をも見逃し難いからである。上に立つものがもっと興劇に考える必要があろう。

○

我々の会もこれで四年目を迎えた。西崎山長都(都立十中山岳部以来)創立より今年で十一年目である。ヨチヨチ歩みではあるが、我々の誇りは若さであり、勝利である。会員一人一人が、今までの様に単に自己の救にとどまることを止め、全体の中の自己を認識することが必要だ。一人一人が会にとって、「なくてはならない存在」になってこそ、真の仲間と言い得る。何も牧柵につく必要はなくとも内面的精神的に欠けてはならない存在たらんと努力することが我々の当面の課題であろう。

○

如何なる理由があろうとも事故を出してはならない。責任をとるということは、山行後の問題ではない。山行前の努力である。軌道に乗りはしたが、悪意敵に乗を選ぶことが無きように、常に意識的行為でありたい。この様な意味で、軌道に乗った今年こそピンチであることを認識する要がある

(MASA)

西朋報告 十号

東京都中野区大和町一八〇 田中方

都立西高OB会

西朋登高会

昭和廿一年九月一日発行

第五年度冬山

66 後立山縦走・爺岳東尾根

前言

昨年度スバリ岳西壁を目指したものゝ、第一尾根はともかくとして、その主目標たる第二尾根は吹きまくる風雪に一触したのみにて敗退の苦汁を嘗した。アタック隊以外は、主稜を充分に歩くチャンスすら自ら得なかった。後立山で充分に主稜を歩いた後バリエーションを再考せねばならないのである。しかしながら白馬より針ノ木に至る延々たる山稜は休暇の関係上、一部縦走隊による五竜岳～針ノ木岳に縮少し、本隊は冬山ラッシュをさけて爺岳東面より鹿島槍登頂をサポートを兼ねて行うこととした。期間は十二月廿九日より一月十日とした。爺岳東尾根は一岩峰を有するのみの尾根ではあるが、数隊もの嫌踏を拒める冷側を敢えて敬遠し、何ら気がねなく山登りを楽しみたかったので他に理由はない。十二月二十九日縦走隊四名及びサポート二名が入山。サポート隊は三十一日、縦走隊と別れ、本隊に入る。本隊はBHを源汲荒井氏宅とし、CIを白沢天狗上の峰とし、CIIを爺岳頂上とした。隊名称は縦走隊を第一隊とし、本隊を第二、第三隊とした。

人員

安藤英弥	監督	28	山口緯弘 24
田中将利	リーダー	24	米野弘郎 22
田中異	リーダー	24	松田朝夫 24
町田明	リーダー	24	成瀬泰雄 23
笹田英次	リーダー	24	鈴木潤医 22
林武志	食糧	22	飯塚康史 22
福田宏二郎	器具	22	京田守弘 20
小田尚於	記録	22	
岡谷徹但		22	

記録

縦走隊（第一隊）

一二月二九日（雪）

会計報告

参加費　28,700
寄附金　3,100
計　31,800

内訳：—

	予算	支出
食糧費	20,700	20,300
燃料費	3,200	2,750
器具費	3,200	2,090
医薬費	1,600	1,600
旅務費		4,535
荒井家御礼		3,000
葉子折		300
オートバイ		800
山口宿泊		250
雑費		185
合計		31,275
残額		525

器具表

品名	数量	CI	CII	縦走	備考
幕用{ミード/ウインパー} 天幕	4	No.8,11	No.10	No.5	
ツェルト	1		No.9		
マットレス(ヘアロック)	19	9	6	4	
石油コンロ	6	スペア小 プリマス	スペア大 杉本	スペア大	(四阿屋を含む)
スコップ	3	1	1	1	
ザイル 30m	4	2	1	1	二本スッポス(CI—三田)
〃 40m	1	1			
〃 補助	1			1	
カラビナ	12		8	4	
ハーケン	24		16	8	
ハンマー	3	1	1	1	
炊事用具	4組	2	1	1	
気圧計	3	1	1	1	
石油	14gal	4(0.5)	6(3)	4(0.5)	( )内残量
ローソク	50	20	20	10	
メタ		4	5	5	

と下って行く。バスまでの時間を荒井氏の御馳走を受ける。D登高会が遭難したと初めて聞く。笹田は奥さんの待つ細野へ。野郎共は浦島峯由山辺温泉へ。

（田中実、小田、田中将）

後記

今回の冬山で初めて日数が欲しいと思った。せめて廿日間休暇のとれる中堅会員が十名居ればと残念に思った。我々は未だくやれる。廿日間あれば裕に白馬から針木まで縦走出来る力を持って居る。それだけに学生会員の奮発を来年度に望もう。これが残念な才一。廿日間と云わずとも後一日余分にあれば、針ノ木を廻れた筈だ。

結果論に終るが、あれ程準備会で検討した本隊のルートを、先発隊の慌ててから、森林の尾根の末端から取りついた事である。ゆるい長大な尾根は労多くして功少しなのだ。雪崩の危険がないかぎり最も有利なルートを選択することも技術の一つである。休暇が短かければ短かい程、一考の余地がある。技術とは岩登りのみにあるのではない。時に応じた判断力が必要なのである。未熟の一言につきる。縦走する力を持っていながら、CIIを命へ上げ得なかったこと、第三隊が爺岳登頂出来なかった事の一因はこれだ。これが才二の残念である。しかし我々は、この冬数パーティが五竜、鹿島槍縦走を試みて天候の為成し得なかった縦走を我々だけが通過した一事を以って、小さな満足をしている。一人々々皆よくやってくれた。来冬は少い休暇を無駄なく力一杯登ろうと思う。山は登るためにあるのだから。

（田中将）

1958.06.01 発行，　西朋 No.14

再び高校山岳部について

主として都立の場合

田中將利

今日の新聞は都立広尾高校山岳部員四名が谷川岳で遭難を報じている。それによると学校側も家庭側にもかくれての山行であると主張じみた事を述べている。私は広尾高校の山岳部が、どの様なシステムの部であるか、又どの様な内状かも知れない。しかし遭難したのは事実であり、そこにそれを導く必然的要素があったに違いないからこそ起ったのである。私の知る範囲の中の高校山岳部に於て（主として都立）その必然的過程は共通していると見てよい。私もその一人であったが故に、今一度私見を述べたいと思う。

彼等は山に登りたいのである。だが未だ「山」と云うものに対して漠然とした影しか知らないのである。彼は山が知りたいのだ。彼等に良き指導者があれば問題はないのだ。第一に飛びつくのが案内書であり山岳雑誌である。案内書は、いったいどんな種類の人間が作るのか。山は静にして動。刻一刻条件が変る。今さら私如きものが云うまでもない。それを何枚かの原稿用紙で書き上げようとする。将に天才というべき何者でもない。これを書く様な天才達は、これを読む人々の受取り方が分っているだろうか。分っていれば絶対に書けない筈だ。絶対に。書く人にとっては、天候の急変は判断出来るかも知れないが案内書を指導者とする様な登山者には、何が危険であるか、又危険とな

ったらどうしたら良いか、書面の上では全く理解出来ないのである。危険に直面していてさえ理解出来ないのである。十年前の中学時代の山行と振返る度に背筋に冷汗を覚える。例えば雪渓上のグリセード、ピッケルワークは登山技術書に書いてはあるが、その練習方法と練習時の危険性について述べている文献があるかどうか。もう一度云おう。都立高校のみならず多くの高校山岳部には、良き指導者が居るところはあまりにも少いのである。

第二に昨年都教育委員会から都立高校に対する校外活動に関する指令が出された。山岳部もその例にもれず、必ず教師の同行が必要となった。教師が居れば安全な山登りが出来るとの考えの為らしい。教師が山に於て有能な人であれば大いに結構なことである。しかし多く都立高校の場合、完全に希望に反している現状を都は知っての上だろうか。ズブの素人の教師が危機に直面して、誤った判断をした場合、どの様な事態が起るか、過去の多くの遭難例を見ても想像に余りある。しかし都は何らこれの対策をも画さず又、考慮もしていない事実はどう解釈したらよいのか。しかも幾つかの山行例まで指令している如き。多くの学校の場合、教師は自ら山の危険、云いかえれば自己の職場の安全の為に山岳部から遠のこうとしている。生徒を危険な山行から守り導くのではなくして、出来るだけ目をつぶろうとしている。遠慮なく云おう。これは事実なのだ。現に小石川高校に於ては指導（名目上

ですら）する教師がなく山岳部は学校側より解散させられた。解散したら生徒は山登りをしないのか。名目上の指導教師の場合は、強力なOB会を有する学校でさえ、山行毎に学校側からこの山行は学校側が知らないことにしてくれと申込まれている。学校側から家庭にその様な申入れがあれば家庭も山行を禁止するは当然のことである。山に登りたい少年の気持が、これで満足出来るか。学校側が自己の責任上、知らない事にしてくれとは一体何を意味するか。登山はスポーツとして堂々と教育すべきものであろう。良き指導者もなく、断然な申入れや、一方的禁止の結果は、生徒達をいたずらに、危険な内緒の山行へと追いやってしまうことになる。

世の家内書を書くお偉い登山家や、遭難批判者共よ。大先生方の云う自殺的遭難を起させているのは一体誰なのか。高校生の遭難が多いと云うお偉方は、この様な事実を知っているのだろうか。東京の高岳連既になく、全国高岳連はお祭りのみが大好きだ。

都は指令を出した以上、高校山岳部教師を教育する義務がある筈である。名実共に判断力の欠しい高校生を指導出来得る教師を養成すべきであろう。さもなくば、それに準じた方策を立て、貰いたいものである。それは急を要する。出来なければ各高校の若い井ノ中の蛙的な高校山岳部OB共をたゝき上げる方策が必要である。山登りを楽しくしたいならそして安全にさせるには決して禁止や責任回避であってはならないのである。

労多くして功少し、これが高校山岳部の指導である。しかし決して放置すべきでない。有名登山家の御理解と一顧を切に願うものである。(五二三)

西高山岳部近況

▲99A 鳳凰三山　九月二二～二三日
田中康、岡谷興、橋本鋼、木原、杉浦、中村乙、蟹沢、秦、高山、田辺、小林、梶内、原田、川田　（一四名）

▲99B 北八岳　九月二二～二三日
篠崎先生、今井、中村晃、（女子）藤田、小木、大石　（六名）

▲北岳池鈴屋根　一〇月一二～一四日
田中康、沢野、中村晃　（春山偵察）

▲100 塔ヶ岳紅葉　一〇月一五日
田中康以下二三名
(A) 水無本谷―田中康、橋本鋼、中村晃、杉浦、川田、橋本章、鈴木栄、大石
(B) 源次郎沢―岡谷興、汎野、蟹沢、梶内、原田、藤田、小木
(C) 勘七沢―今井、木原、中村乙、植木、田辺、林隆、秦、中村恭

▲一一月一日付
正部員推薦　橋本鋼太郎　（27）
準部員　〃　秦　武司、梶内俊夫、田辺和彦、川田秀明、高山利忠
原田　勉

▲雲取山集中　一一月二三日
再び流感の為山行は学校より禁止されたため各谷よりの集中は行わ

れず個人山行的方策で行なった。

田中康、岡谷興、橋本鋼、中村晃、梶内、秦、高山、川田、原田、小木、大石

▲101スキー合宿（黒姿）　一二月二六～三〇日

山口（OB）、田中康、岡谷興、今井、木原、沢野、中村晃、中村乙、植木、高山、秦、梶内、原田、川田、小木、大石、鈴木崇

▲二月一日付

正部員推薦　中村　晃（28）

▲102川苔山雪化山行　二月二二～二三日

笹田（OB）、田中康、岡谷興、今井、橋本鋼、中村晃、高山、秦、梶内、川田

▲103北岳池鈴尾根春山合宿　三月一六～二一日

林武、小田、飯塚（OB）

田中康、岡谷興、今井、橋本鋼、中村晃、梶内、秦、川田、高山

三月一六日　（晴）小田、飯塚OB及び今井以下八名荒川小屋入

三月一七日　（雪）小田、今井、岡谷、中村、梶内、秦の六名池山上にCI建設。他の四名はボッカ。

三月一八日　（風雪）　七丈頭にCII建設、小田、今井、中村の三名入る。岡谷、秦、梶内はCIへ帰る。BHの飯塚、橋本、高山、川田CI入。林武、田中康東京よりCI入。

三月一九日　（快晴）才一次アタック隊小田、今井、中村北岳登頂CIへ帰る。CI隊は八本歯往復し、才二次アタック隊林、田中、岡谷CII入。

三月二〇日　（風雪）才二次アタック隊三名間岳に向うも風雪烈しく視界極めて悪く北岳登頂のみにとどまる。CII撤収。小田、橋本下山。他は八本歯往復。

三月二一日　（晴）バットレス登攀のOBと交代して田中以下全員下山。

今年度（昭高才一二年度）後半は二年部員が充実し、学校側の白眼視にもかゝわらず、外見にとらわれず着々と内容ある山行を行うことが出来た。春山合宿北岳も間岳こそチャンスを逃したが、高校生としては充分の合宿であったと思う。学校側に認められぬ合宿であるが故にOB中堅を三名付添わせたが、現役のみにても充分成し得る実力があったことを付言しておく。願わくば、現役が学校当局より温かい指導を受けて山行出来る様になる日が一日も早からんことを期待する。昭和廿三年度の予算も最終決定の際十一万円より三万八千円に一方的にけずられてしまった。山岳部の活動の主体が、校外である以上、これを外部に理解させることが、三三年度の一つの目的としたい。　（将）

○　○　○

— 巻頭言 —

現役指導を再認識する

田中将利

前号で林武志が断層への憧憬を訴えた。僕の世代の切目を憂える。我々の会は高校山岳部に直結しているだけに切実に思うのだ。高校山岳部は、今改めて述べるまでもなく登山に共通する基本力の養成に全力を挙げるべきであって、ハイキングやワンダーフォーゲル的クラブであっても、又先鋭的クライマーの集団であってもならないのである。基本力の養成、修習は、考えようによっては非常に単調であると思われるかも知れない。面白味の少い山行と彼らは考えるかも知れない。又指導するOBにとっても労多くして功少しであるやも知れない。場合によっては、教師や父兄にこの基本訓練が、先鋭的登山の強制と混同され、同一視される場合すら多々ある。現在に於いてはこれら以外の何ものでもないと思っている人もあろう。しかし、我々が一歩後退して、ワンゲル的な山登りや、無智にも等しい彼らの〝意欲的〟な山登りを許すとしたら、又山登りに全くの素人とも云いる教師（部庁の方針）に指導の凡てを負わせたならば……首を縦に振れる仲間が居るだろうか。

我々も経験している通り、彼等の年令に於ける肉体と精神は、未だ不充実であり、その成長の度合も個々の間に、かなりの差違を見出すことが出来る。彼らは人生へ激しい意欲を持って居る様にも見えるが、情熱と云うよりは、むしろ多感として見た方が良いであろう。情熱と云うにはあまりにも肉体的、精神的に弱いからである。

我々の会に与えられている使命は、我々の資等を意欲的に前進せしめると同時に、この多感にして扱いにくい後輩を山で死なぬ様に正しくリードしてやることにある。野放しにせず、そして縛りつけもせず、それでいて学校内でも胸を張ってスポーツマンとして成長する様に、手綱をとらねばならない。それには常に彼等一人一人の成長を見、そして彼等の良き相談相手である必要がある。彼等を成長させる強靭の手綱を取る者は、我々以外の誰でもない。

然し今の我々を顧る時、会の主力メンバーと現役との間に立つべき世代の貧しさを見ることが出来る。質と量に於いて、林が叫ぶ様に現実に然りなのだ。来年は一層断層の切れ目が喰い違って来る。現役の中で最も世代の近い弟ですら、僕とは年令的に八年の差があり、部の運営に関して感覚的差違をしばしば感ずるのだから来年度の部の中心となる現在の一年部員との、この差はまだまだ開くと思ってよいだろう。彼等の良い相談相手となるべき近い世代を層量ともに育てることが肝要である。これら一連の問題は、今新たに波紋を投げたのではなく、六年程前に逆のぼりはするが、論じて成し得なかったのは我々の重大なる怠慢であると同時に、販売しのつかぬ錯誤なのだ。来年度、この錯誤を更に大とするか、この断層をいくらかでも埋め得るか？我々に課せられていることを再認識する要に迫られている。今冬の登攀と、部会での「断層線」への指導に全ての課題が連っているのである。

69 狼火場沢奥壁

係・田中将利

参加者・田中将利、田中実、福田宏二郎

四月二〇日（晴）

富士見（五、四〇～六、一〇）―立沢公園（六、三五）―朝食（七、二〇～七、五五）―広河原出合（八、五〇）―狼火場出合（一〇、三〇～一〇、五〇）―昼食（一二、一五～一二、四五）―室下引返（一二、三五～一三、一〇）―立沢（一六、四〇～一七、〇〇）

登山ブームだと云うのに行き会う人もなく久々の山行も、この上なく楽しい。予期して居た雪は広河原沢を過ぎると現れた。樹々は昨日までの新雪の為か輝く雪化粧している。両岸が迫る頃、水流は雪の下に影をひそめた。尚永に、そして濃藍の空に冬山の錯覚を呼ぶ。

南猿から望むとき、狼火場沢の奥にすっきりした岩があるのではないかと云う漠然とした望みを胸に飛び込んで見たもの、狼火場沢出合ですでに一〇時を大分廻っていた。岩小舎は巨大な氷柱と鄙厚い青氷で生活できそうにもない。狼火場沢に入ると雪面は容赦を遠慮なく返してギラギラと燃え立ち、ラッセルは必然的に重い。沢が左に廻りゴルジュを形成すると二股となり左股は二〇mもあろうかと思われるアイスフォールをその奥に残している。勿論右が本流である。奥壁を期待していた我々ではあるが、重いラッセルの連続と周囲の森林からその存在をあきらめて左岸の岩棚で昼食を摂り、空身で右股に入る。ラッセルは遅く重い。二、三の急なルンゼのゴブリを越すと沢は九〇度左折した。両岸は迫って赤茶けたゴルジュとなり正面に高々と崖壁が現れた。このゴルジュは二〇〇mもあろうか。これが切れると沢は正面の岩壁を限りまく様に広く分岐された。我々は正面の広大な雪面を登った。鞍は高く遠い。正面は難壁と謂われる峯かと思われるが右半面は約一五〇～二〇〇mのスラブ状の岩壁を持ち、その右端に垂直な門岩峰を有している。その上で傾斜は緩ち這松をまじえた露岩帯となり、頂上まで約三〇〇mの高壁があると思われる。权現沢正面や広河原のそれとは比べべくもないが、登攀の対象としては右半面に喰い込む縦本のクラックは面白そうだ。時間的にも又、ザイルを昼食地点に残して来た我々には、室下のバンドから引返さざるを得なかった。生きもの、様に、ころがるスノーボールと戯れながら、ラッセルの跡を下る。スケールこそ小さいが期待した展開に今日の幸を得て、何となく楽しかった。久し振りの晴が心地よい疲労感と睡魔を感じつゝ、広河原の出合近くから立沢川左岸の小路に入る。広河原の奥壁が落陽を浴びてダイナミックに森林を圧して居た。八ヶ岳もいい山だなと、ほくそ笑みながら複雑怪奇な西岳稜線の森林に飛び込んで行った。

（田中将利）

1958.06.08 西朋 No.15

72

谷川岳東尾根

係・田中将利

期日・六月八日（雨）

参加者・田中将利、飯塚康史

新緑の旧道は雨にうるんでいた。一ノ倉の上部は見るべくもない。ツェルトをかぶって一ノ沢出合で栗子を見ながら朝食を摂る。七時半雨は止まず、東尾根を登ることにして一ノ沢に入る。三十分も登ると雪渓は大きく切れて止むなく左岸を巻き約五〇m上で雪渓に飛び下りる。この上ではチムニー滝が現れていた。アンザイレンして先客に失礼して左の壁から乗り越す。シンセンのコルでザイルをとき、休息は無用と見て、すぐ東尾根を登る。泥水流れる中をぐんぐん登る。ガスで何も見えない。マチガ沢より時折ハーケンの音がした。どこを登っているのかな。トマの耳直下で、昼食、ぬれて寒い。頂上に立ったため水一〇時三〇分、風が背後側より吹きつける。肩でリンゴをほゝばりさてこれからどこへ下ろうか　と迷ったが結局過去の湯の窓に引かれて、遅々の西黒尾根をハイカーにまじって下る。女性の尻持をつくこそあわれ。西黒沢出合が一時、泥を洗い落し、湯檜曽まで歩く。いつの間にか雨も止み、心ゆくまで湯に体を沈めた。（田中将利）

1966.10.08 彷徨 No.18, (寄稿)

〝岳友は財産である〟

四期　田中将利

山へ登る動機は人それぞれにとっていろいろあると思う。しかしその底流の中には、未知に対する憧憬、換言すれば、より美しく、より高く、より厳しくを求めんとする心の動きがあることは否めない。その心こそ人間のみに与えられた特権ではあるまいか。

山登りは一人でも出来る。しかし未知を求めんとするには、我々の普段の生活環境とは全く異る未知の条件が伏在していないとは云い切れないのである。それは自然条件であり又人為条件である。自然条件とは、高低、気温、乾湿、風向、風力、地形等々であり、人為条件とは個人の体力、体調、判断力、装備食糧、燃料等である。一方山登りが未知に対する求道であるならスポーツ登山と云っても過言ではない。スポーツとしての登山ならば、奇を求めてはならないし、又生きていてはじめて未知に対する飽くなき前進が可能なのである。

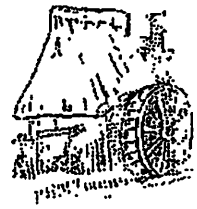
それ故に只一度の過失、錯誤も許されない極めて厳しいスポーツと云うことが出来る。これは他のスポーツの如く人間同志の憎いと

は全く相違する。

もう一度くり返す。たゞの一度、たつたの一瞬の判断の錯誤・過失も又虚栄や外面や、若い人にありがちな〝ハネアガリ〟も許されない。そこには自己を正視正覚する〝意志〟と〝勇気〟あるのみである。

以上の如く山登りの条件とは、自然条件と人為条件である。その内自然的条件は、只〝そこにある〟のみであつて、その分析、正視以外にない。しかし人為条件の方は我々の方で創造し得る可能性が残されて居る。完成せる個人が無いことは云う迄もないが、自己を正しく判断することの出来る複数の人間が協力することにより、一個人の力をしのぐ戦斗力、防御力が生ずることは可能である。この様な意志を持つた個々が合体した時、そこにパーティ（集団）が生れ、その集団が学校等を基盤とするならば山岳部と呼ぶ。が、一度生れた集団は、個々の集合体でありながら、それは既に一個の有機体としての力を持つ。それが組織でありパーティである。彼は最早、一人の人間が判断し、活動する如く、判断し活動しなければならない。個々の力の合計力よりも、ソラスがなければ集団としての意味がないのは勿論である。そして学校山岳部は、常に若く年令をとらない。云うまでもなく年毎に、卒業生を送り、未経験の新人を迎えるからである。学校が存在し、山登に憧れる生徒が無くならない限り山岳部は息吹き、考え、育たねばならない。それは組織された有機体として息吹く以上、彼自身もたゞの一度も過ちを犯すことは許されないのである。そこには彼を中心として、学校ー父兄ーOB会のライン。彼の中にリーダー＝一線部員ー新人のラインがあり、各学年毎に横のスタッフがある。このラインとスタッフとそは厳然とした愛情と云う接着剤によつて強固に、そして無限の基盤の上の如く結着して初めて集団の効果を生ずるのである。

そしてその集団こそ、感受性の強い多感な有為な年令の学生を、孤独のオリの中に投げ込んでいる今の受験本位の学制に抗し、大風呂敷的に云うならば日本の本当の将来をリードするエリート達に、人間味あふれる（独善的でなく犠牲と協調を理解出来る）友達を作らしめる唯一のものと思うのである。その厳しい山登りの中でこそ、虚栄や、〝ずライ〟のない心の友を作ることが出来るのではないか。この友こそ真の友でなくてなんであろう。斯く云う私も二十年間の山登りを通じ厳しすぎる程厳しく、鬼の如く感じた先輩を持ち、又私自身に対する厳しさに協力してくれた同輩後輩を数多く作ることが出来た。この先輩、同輩、後輩なくして何の友人ぞ。私は世間並の金力も権威もないが、私は世の中を胸を張つて歩む。我岳友こそ私の貴重な、そして何者にも換えることの出来ない、何者にもうばうことの出来ない財産であると。!!



1969.10.30 彷徨 No.20, (寄稿)

高校生のリーダーについて

田中　将利（4期）

私が西高山岳部のリーダーに選出された時代を振り返つて見ると既に20年に近い歳月が流れている。短い様でもあり長い様でもある。私が入部し在学した時代――それは敗戦后間もない昭和21年から，朝鮮動乱によつて日本経済が立直つて来る昭和27年までの六年間――は云はば，戦前の登山界の中核旧制高校，旧制大学が持つていた実力を新制高校，大学がいかにして継付こうとしているかと云う頃でもあつた。又西高に於いては，ハイキング形式からスポーツアルピニズムに脱皮せんとする胎動期にあつた。

登山する人口も少く，登山路，ガイドブック等があまりあてにならない頃である。登山靴すら容易に手に入らぬ頃，自らの手で兵隊靴を改良していた頃であつた。だから今の高校生が，入部時全個人装備がととのい，すぐに北アルプスに容易に入山することを大変うらやましく感ずることがある。

登山とは一体何か……それはさて置き，登山とは一人でも出来るスポーツである。文部省がどうの，学校当局がどうの，と云はずに山に登りたくなつたら1人で登つてはならないと云う規則はない。又ルールがないスポーツと云えば登山だけと云えようか。

しかし考えても見よう。私達のすむ都会生活を。暑ければクーラーがある。寒ければ，暖房も入る。歩きたくなければ車がある。腹が空けば電話一本で出前が来る。眠くなれば暖いフトンが待つている。不満があればゲバルトしても死刑にはならない。

現今の山ではどうだろうか。装備はすぐ手に入る。よほどのボサ山でない限り冬山でも先行パーティのラッセルがある。君登りガイドブックは，ホールド，スタンスまでこまやかに教えてくれる。良い山は皆，小屋ケ岳の観を呈している。楽しき哉登山。

山とは平坦地より高いから山と云う。高いと云うことは寒いと云うこと。高いと云うことは，傾斜があること。傾斜があると云うことは，水が流れること。雪が降れば崩れると云うこと。水は又凍結すると云うこと等々。……

山登りが楽しく又容易になつた反面，この様な子供でも判る様なことを頭から抜きさつてしまつた山登りを人々はしていないだろうか。

山登りは一人でも出来る。しかし複数人でも可能である。1人と複数人とでは複数人が強いと思つている人も居る様である。では何故にパーティを組むのか。何故にリーダーを必要とするのか。リーダーの権限とは一体何か。十八才未満の高校生にリーダーが務り得るのか。実業登山委会と高校山岳部の目的は同じか。

今西高山岳部の中で，ごく当り前のこととして行はれている数々の不文律，恐いは行動形態の多くは，ハイキング式山行形態からの脱皮時代に，その1つ1つについて今では考えられもしない抵抗の中で，それこそ真剣に創り上げて来たものである。それらがすべて現今の部に必要かどうかは又別問題である。たゞ私の云いたい事は，スポーツアルピニズムとは，自らの限界を正知正覚すると共に，確実にフロンティア・ラインを押し進めることにあると思う。その自らとは，一つに個人の中に存在し，1つにチームとして存在することである。その限界の認識には1寸の甘さを否定する厳しさが必要だと思う。1つの事象を無意識に過ぎ，恐いは単にその底にあるものを忘れ形式化することは，厳にいましめる必要がありはしないか。山登りに於ける判断のファクターは，非常に複雑に入りなすのであるから定形化したり，公式化することは禁物である。それらを早く正しく判断するには，かなりの経験を必要とすることは勿論である。

私も17，8才の頃から22，3才の頃は，かなりの自信もあつたし又，大人であると云う意識を持つていたことは確かである。

しかし20年の歳月を通して見て，それはとんでもない誤りであつて山登りとは，もつと奥が深く，リーダーの判断とは恐しい事だなとつくづく思う様になつた。過ぎし山登りの1頁1頁にリーダーとしての孤独感を思い出すと同時にゾッと背筋に冷いものが走ることがある。

よく高校生の部長だのリーダーだのと云うことを聞く。他のスポーツはいざ知らず山登りにあつては，無限に近い自然，人為環境を2，3年の有限経験によつて，よしとし，高校生部長，リーダー等のはねあがり者が出現するとすれば，無責任ものと云つても差支えなかろう。

高校登山界を滅すことは，絶対にさけねばならない。が少くとも高校山岳部に必要な指導層の強化は，単に西高のみにとどまらず，日本の登山界にとつてエベレストよりも急務ではないのか。

2004年4月24日の西朋総会での田中将利さんのお話のメモ

（文責　山野裕）

西高WV部員の山行報告に対して。

声が小さい。それでは人間同士のコミュニケーションができない。山登りは経験以外の何物でもない。都条例で高校生の雪山登山ができなくなったが、経験を積んだOBが一緒に付いて行く。本人が未知の物への憧れを持って欲しい。

高校生の山登りは①ご飯がいっぱい食べられて、②うんこをいっぱい出せて、③どんな時でも眠れること、が出来ればいい。後は大学で好きなことをすればいい。

西朋の諸君は自分たちが高い所を目指すとともに、西高生に山登りの夢のすばらしさを伝えて、かつ3つの基本をきちんと教えることをやって欲しい。先輩がしっかり後輩の面倒を見るように。縦のラインと横のラインがうまくいってすばらしい会になる。夢を持つ集団になって欲しい。山登りの危険は予測できるものだ。

挨拶のときに

1946年に旧制中学に入学した。1946年3月に火災があった。1946年5月に須羽先生が山岳部を設立された。入部は1年から5年で150人と多かった。第1回の山行は海沢に行った。先頭と最後が3〜4時間も間があいた。頂上と沢の入り口であった。

1947年に学制改革で新制高校ができた。

1950年に都立西高等学校になった。8月の雲取山山行で日原川の桟道から50m落ちた人がいた。西高山岳部では救援に行けず、豊多摩高校のOBが助けた。

1950年に出来たOB会を解体し、OB会志願制度にした。自分たちが山に登るPDCA（Plan Do Check Action）が大切。若い人が夢を持つのが大切。夢を実現する準備をよくする。都会の社会は危険が少なくなったが、山登りは違う。

私は今年71歳になったが、うちの会社（田中金属）の若い人にもPDCAをしっかりとするように言っている。どんなリスクがあるか考えなくてはいけない。人間には判らないことが沢山ある。どんなリスクがあっても対処出来るように準備すること。自然と人間の何人かのパーティの戦いだ。より高いところへの挑戦する気持ちがなければ、山登りは危険だから止めなさい。今までに100人以上の死体を扱ってきた。何の準備もなしに山に登っていくのは困る。

1953	28	4月 将利さん早稲田大学入学、山岳部に入部。早大山岳部での活躍は部報リュックサックを参照されたい 4月 西高に8期生入学 4.1 西朋登高会発足 4.20 彷徨10号発行 NAC会長安藤さん、幹事と現役監督に将利さん(早大) 将利さん西高の1952年4月～8月のの公式山行講評 5.10 将利さん西高の川苔山新人歓迎会に参加 6.6-7 将利さん西高の丹沢水干沢及び源次郎沢に参加
1954	29	3.27-4.4 西高積雪期鶏冠尾根より金峰山。アルパイン派の情熱の勝利。 4月 将利さん早大2年、西高に9期生入学 11.1 彷徨12号発行 春山の鶏冠尾根より甲武信金峰山中心。山岳部史その2
1955	30	4月 将利さん早大3年、西高に10期生入学 4.20 西朋6号発行 将利さん「第3年度のめざすもの」 7.1 西朋7号発行 9.15 西朋8号発行 将利さん「資料より見たる積雪期魚沼山塊」 9.12 西高山岳部創立十周年記念川苔山集中に将利さん熊鷹沢参加 10.22 彷徨15号発行 今年3冊目 12.15 西朋9号発行 12.31～1.8 厳冬期魚沼八海山戦後初登
1956	31	4月 将利さん早大4年、西高に11期生入学 5.1 西朋10号発行 8月の夏山で1年生塩出さん(11期)肺炎にて病死。将利さんも対応に追われる
1957	32	3月 将利さん早大卒業 4月 将利さん田中金属入社、西高に12期生入学 5.31 西朋12号発行 11.10 西朋13号発行
1958	33	3月 春山北岳 4月 西高に13期生入学 4月 将利さん他2名八ヶ岳狼火場沢奥壁 6月 将利さん他1名谷川岳東尾根 6.14 西朋14号発行 編集責任者が将利さんより町田さん(4期)へ 11.10 西朋15号発行 巻頭言 将利さん「現役指導を再認識する」
1959	34	3月 春山空木岳 4月 西高に14期生入学 10月 福田、関谷さん(6期)滝谷にて遭難死。将利さん田中金属内に対策本部を置き陣頭指揮をとる
1960	35	4月 西高に15期生入学 10.22 彷徨16号発行 7年ぶり ワンダーフォーゲル部へ？？
1965	40	5月 弓削さん(14期)早稲田大学山岳部、前穂北尾根四峰直下でスリップし涸沢に転落死亡。
1966	41	西朋会長 将利さんより小川さん(12期)に交代。 西高側と・PTA・西朋との協議し、西朋が夏山以降の山行に全面的に支援。
1967	42	6.28 西朋特別委員会 正会員認定の件(これが正式な認定は最後か？) 7.2 西朋臨時総会 会則変更 学生会員を中心に立て直し 11.1 西朋16号発行 編集発行人平沢さん(4期)
1968	43	3月 西朋春山横尾尾根から槍ヶ岳
1969	44	5.1 西朋17号発行 編集発行人平木さん(15期) 8月 福田さん(14期)三菱商事山岳部の夏山合宿で奥黒部ヒュテ付近で遭難死。将利さん田中金属内に対策本部を置き陣頭指揮をとり捜索隊を出す。
1973	48	6.1 西朋18号発行 編集発行人伊東伸作さん(21期)
2004	H16	4.24 西朋27号、28号(50周年期年号)発行 編集尾崎宏和(47期)、発行者山野裕(19期)
2005	H17	8.23 田中将利さん逝去

田中将利さんを中心とした西高山岳部、ワンダーフォーゲル部の歴史

西暦	昭和	出来事　田中将利さん、十中、十高、西高山岳部、西朋
1933年	8年	1.6 田中将利さん誕生
1937	12	4.1 東京府立第十中学校開校
		7.7 盧溝橋事件、日中戦争開戦
1941	16	12.8 太平洋戦争開戦
1942	17	3.17 十中第1回卒業式
1943	18	7.1 東京都立第十中学校に
1945	20	8.15 終戦
1946	21	2.21 十中火災
		4月 将利さん十中入学
		4月 山岳部設立　指導教官須羽源一先生
		9.22 第1回山行例会　高水三山
		11.4 第4回山行例会 海沢(公募約150人)
1747	22	3月 十中6期生卒業
		4.1学制改革　東京都立第十新制高校設立
		4月 将利さん十中2年
		10.25創立十周年記念並びに復興祝賀会
1948	23	3.15 十中7期生卒業(中学最終)
		4月 将利さん十中3年
1949	24	3.15 新制高校第1回卒業式
		4月 将利さんら4期生十高に入学(女生徒4名)
		12.24 十高山岳部報No.1発行(部員22人)
1950	25	1.28 校名を東京都立西高等学校と改称
		1月 将利さんこの頃山岳部入部
		3.1 西高山岳部報No.2発行　(新入部員に田中将利さんの名前あり)
		4月 将利さん西高2年　5期生入学(本格的に男女共学男300名、女100名)
		4.29-30 将利さん第24回例会　甚取山に参加　鴨沢から甚取山、唐松谷、日原
		5.28-29 将利さん個人山行　塔ヶ岳　1名
		6.1 西高山岳部報No.3発行
		7.16-19 将利さん奥秩父主脈縦走に参加 3名　3泊4日
		8月21日の今井君遭難についての将利さんの記述が彷徨4にあり
		8.16-18 将利さん個人山行　南秋川の旅　ハチサス沢偵察　将利さん外3名
		9.9 現役OB初の懇談会あり早稲田山岳部安藤さんの話など
		9.20 彷徨第4号発行　部員26名　将利さんは企画係
		9.22-23 将利さん個人山行 カロー谷(日原)　将利さん外7名
		10月　将利さん第6代チーフリーダーになる
		10.23-24 将利さん第32回例会　甲武信ヶ岳に参加　将利さんCL
		11.26 将利さん個人山行 丹沢主脈縦走に参加 将利さん外3名
		12.12 彷徨第5号発行　発行責任者　将利さん　25年1-12月で総山行数54(内例会13)新委員紹介にCL田中将利さん
		1950年の山行ベストテンによると田中将利さんは9回、18日
1951	26	1-13 将利さん三頭山糟指尾根に参加 L田中将利さん外3名
		2.10 将利さん山岳部を退部
		4.5 将利さん鋸尾根参加　将利さん外1名
		4月 将利さん西高3年、6期生入学
		5.17 彷徨第6号発行 田中将利さんは退部していたがSOLITUDEと山麓情報を寄稿
		7.14-19 将利さん第39回例会奥秩父主脈縦走に協力登山で参加。付随山行として営林署の沢から甲武信岳へ
		9.13 将利さん第41回例会塔ヶ岳集中登山の源次郎沢に参加
		10.21 NAC総会　代表安藤英弥さん
		11月？ 彷徨第7号発行 NAC会報No.1も含む。田中将利君印刷の会報を参照して下さいとある
		11.4 将利さん個人山行 越澤(第二次偵察)に参加、平沢さんと
		12月 3月の多摩川南稜縦走のCLに将利さん決定
		12.24 多摩川南稜縦走偵察・荷上行動の第三隊。将利さん、平沢さん　氷川での連絡
1952	27	1.25 将利さん個人山行 川苔山逆川遡行参加、平沢、田中実
		3.1 彷徨第8号発行
		2月末までの26年度の将利さんの公式山行は部外者として11回中4回、入部以来の山行日数は43日
		3.20-24　将利さん多摩川南稜縦走 塩山ー大菩薩峠ー三頭山ー風張峠ー小河内にCLとして参加
		3月 将利さん西高卒業(6期生)
		4月 西高に7期生入学
		5.3-5 将利さん西高の長沢葉背稜縦走に付随、塩地谷小屋周辺
		5.20 彷徨9号発行 多摩川南稜縦走報告が詳しい。1951年度の山行総覧あり。また昭和24年度、25年度と26年度の山行の分析がある。山行日数ベストテンで25年度は将利さん1位10回、21日。26年度は部外者なるも14回、22日で2位。
		5.30 Equipment No.2発行 東京都立西高等学校山岳部並OB会山岳会NAC　文責田中　夏山準備山行、東沢合宿、北アルプス涸沢合宿の計画
		6.15　将利さん西高の勘七ノ沢に参加
		7.16-20 将利さん西高のトサカ尾根偵察に参加
		8.3-12 将利さん西高の北ア合宿に参加

編集後記

二〇〇五年八月、西朋祭を氷川キャンプ場で行って帰宅した翌日に、田中康弘さんからお兄さんの田中将利さんが突然お亡くなりになったことを聞きました。享年七十二歳とまだまだこれからと思っていましたが。

西朋登高会をつくられた方であり、追悼の西朋特集号を企画し、一周忌までにまとめて冊子として出したいと思いましたがだいぶ遅れました。

幸い西朋の上のほうの人を中心に追悼文を送っていただき、田中将利さんが西高山岳部、ワンダーフォーゲル部の部報「彷徨」やOB会の会報「西朋」に書かれた文章をまとめてコピーをつけることによりまとめることが出来ました。

改めて田中将利さんが理想とされたスポーツアルピニズムの追及と山での生活、山で後輩を殺さないとの思いをまとめ、西高ワンダーフォーゲル部員から学生OBを中心とした若い会員に読んでいただきたいと思います。

原稿を送っていただいた会員にお礼申し上げます。

なお、田中将利さんの奥さん田中京子様から西朋に対して多額の寄付をいただき、今回の西朋特別号の出版費用とさせていただいたことを合わせてご報告いたします。

田中将利さんのご冥福をいのりあとがきとさせていただきます。

二〇〇七年八月

西朋特別号編集委員

林武史（六期）、田中康弘（十一期）山野裕（十九期）、遠藤彰（二十六期）、上野利之（四十八期）

二〇〇八年二月二十日発行
発行人　西朋登高会
会長　遠藤　彰
〒274-0813　千葉県船橋市南三咲一-一〇-四八